Oracle8*i* Client for Windows

インストレーション・ガイド

リリース 8.1.7

2001 年 2 月

部品番号 : J02296-01

ORACLE®

Oracle8*i* Client for Windows インストレーション・ガイド リリース 8.1.7

部品番号 : J02296-01

原本名：Oracle8*i* Client Installation Guide, Release 3 (8.1.7) for Windows

原本部品番号：A85303-01

原本著者：Mark Kennedy

原本協力者：Harish Akali, Warren Briese, Kristy Browder, Toby Close, Jonathan Creighton, Marcel De Maria, Mike DeMarco, Saheli Dey, Raj Gupta, Nicole Haba, Daniella Hansell, Anna Hernandez, Marilyn Hollinger, Clara Jaeckel, Stephen Lee, Matt McKerley, Miranda Nash, Anita Puronto, David Saslav, Helen Slattery, Debbie Steiner, Linus Tanaka, Tom Van Raalte, Alice Watson, Zakia Zerhouni

Copyright © 1996, 2000, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されております。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに v

1 Oracle8*i* Client の紹介

サポートされるオペレーティング・システム 1-2
Windows での新機能およびコンポーネント 1-3
8.1.7 の新機能 1-3
8.1.6 の新機能 1-4

2 インストールの概要

Oracle Universal Installer 2-2
インストールに使用できるインストール・タイプ 2-2
Oracle Universal Installer コンポーネントのインストールの概要 2-4
インストールの開始 2-5

3 インストール要件

FAT および **NTFS** ファイル・システムのシステム要件 3-2
Oracle8*i* Client 3-2
移行とアップグレードの要件 3-3
個々のコンポーネントの必須要件 3-4
単一 **Oracle** ホーム・コンポーネント 3-5
ネットワーク・プロトコル・ベンダーの要件 3-6

4 Net8 構成方法の選択

ネットワーク構成方法 4-2
Net8 構成方法の選択 4-3
クライアントのネットワーク構成 4-4

5 Oracle コンポーネントおよびドキュメントのインストール

Windows NT と UNIX でのインストールの相違 5-2
キーボード・ナビゲーション 5-2
インストール前の作業 5-3
Oracle8*i* Client のインストール 5-4
「管理者」、「プログラマ」、「アプリケーション・ユーザー」 5-5
カスタム 5-6
インストール・セッションのログの確認 5-8
Web ブラウザおよび Adobe Acrobat Reader のインストール 5-8
Web ブラウザでのドキュメントの表示 5-9
Web ブラウザがない場合のドキュメントの表示 5-10

6 インストール後の構成作業

NTFS ファイル・システムと Windows NT レジストリ権限の設定 6-2
NTFS ファイル・システムのセキュリティ 6-2
Windows NT レジストリのセキュリティ 6-3
個々のコンポーネントのインストール後の構成作業 6-3

7 Oracle のコンポーネントとサービスの削除

Oracle Universal Installer を使用した Oracle コンポーネントの削除 7-2
作業 1: Net8 サービスとレジストリ・エントリを削除する 7-2
作業 2: Oracle Universal Installer でコンポーネントを削除する 7-3
手動でのすべての Oracle コンポーネントとサービスのコンピュータからの削除 7-4
Windows NT でのコンポーネントの削除 7-4
Windows 95 または Windows 98 でのコンポーネントの削除 7-6

A インストール可能な個々のコンポーネント

Oracle8*i* Client のコンポーネント A-2
8.1.7 では使用できないコンポーネント A-6

B 個々のコンポーネントの説明

コンポーネントの説明 B-2

C 各国語サポート

NLS_LANG パラメータ C-2
一般的に使用される NLS_LANG の値 C-3
MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定 C-4

D Legato 製コンポーネントのインストールと削除

LSM Server D-2
LSM Server の更新 D-2
LSM Server のインストール D-2
LSM Server の削除 D-5
LSM Administrator GUI D-6
LSM Administrator GUI の更新 D-6
LSM Administrator GUI のインストール D-6
LSM Administrator GUI の削除 D-8

用語集

索引

はじめに

このガイドは、Oracle8*i* Client の概要、インストール前、インストール、インストール後の処理に関する主たる情報源です。

次の項目について説明します。

- 対象読者
- 構成
- 表記規則

対象読者

このドキュメントは、読者が次のことを十分理解していることを前提にしています。

- Windows NT、2000、95 または 98 を十分理解していて、コンピュータ・システムにインストールおよびテスト済であること
- オブジェクト・リレーショナル・データベース管理の概念

このガイドは、Oracle8*i* Client のインストールまたは構成をする方に必要です。

このガイドでは、Windows NT、Windows 95、Windows 98 および Windows 2000 オペレーティング・システムに適用できる Oracle8*i* Client ソフトウェアの機能についてのみ説明します。

構成

このドキュメントは、次のように構成されています。

第 1 章「Oracle8i Client の紹介」

Oracle8*i* Client、サポートされるオペレーティング・システム、リリース 8.1.6 以降の Windows での新機能を紹介し、Oracle ドキュメントの使用方法を説明します。

第 2 章「インストールの概要」

Oracle コンポーネントをインストールする方法の概要を提供します。

第 3 章「インストール要件」

Oracle8*i* Client のインストール・タイプおよび個別のコンポーネントに対する要件を説明します。

第 4 章「Net8 構成方法の選択」

インストール中に使用可能な Net8 クライアント / サーバー・ネットワーク構成について説明します。

第 5 章「Oracle コンポーネントおよびドキュメントのインストール」

Oracle コンポーネントのインストール方法を説明します。

第 6 章「インストール後の構成作業」

インストール後の構成作業について説明します。

第 7 章「Oracle のコンポーネントとサービスの削除」

Oracle コンポーネントおよびサービスの削除方法について説明します。

付録 A「インストール可能な個々のコンポーネント」

Oracle8*i* Client の各インストール・タイプで使用可能な個々のコンポーネントを説明します。

付録 B「個々のコンポーネントの説明」

Oracle8*i* Client の各インストール・タイプで使用可能な個々のコンポーネントとそのリリース番号を説明します。

付録 C「各国語サポート」

各国語サポート（NLS）について説明します。

付録 D「Legato 製コンポーネントのインストールと削除」

Legato コンポーネントのインストールおよび削除の方法を示します。

表記規則

このドキュメントで使用される表記規則は、次のとおりです。

規則	例	意味
大文字	`C:¥ORACLE¥ORA81`	ALTER DATABASE のようなコマンド名、SQL 予約語、キーワードを示します。ディレクトリ名やファイル名も示します。
イタリック	■ 変数を示すために使用 *file name*	入力が必要な値を示します。たとえば、コマンドで *filename* を入力するように要求された場合は、ファイルの実際の名前を入力する必要があります。
大カッコ [ ]	*X*:¥[*PATHNAME*]¥ORACLE¥*HOME_NAME*	オプション項目を示します。たとえば、Oracle ホーム・ディレクトリを作成する場合、¥ORACLE パス名の前にパス名をオプションとして指定できます。 大カッコは [Enter] などのファンクション・キーも表します。
「スタート」→	「スタート」→「プログラム」→「Oracle - *HOME_NAME* 」→「Network Administration」→「Net8 Assistant」を選択します。	プログラムの起動方法を示します。たとえば、Net8 Assistant を起動するには、タスクバーの「スタート」をクリックし、「プログラム」、「Oracle - *HOME_NAME* 」、「Network Administration」、「Net8 Assistant」の順に選択します。

規則	例	意味
C:¥>	`C:¥ORACLE¥ORADATA>`	現行のハード・ディスク・ドライブの Windows NT コマンド・プロンプトを示します。プロンプトには、現在作業しているサブディレクトリが反映されます。このドキュメントでは、MS-DOS コマンド・プロンプトと呼びます。
ディレクトリ名の前の円記号（¥）	`¥ORADATA`	ディレクトリがルート・ディレクトリのサブディレクトリであることを示します。
ORACLE_HOME および *ORACLE_BASE*	*ORACLE_BASE*¥*ORACLE_HOME*¥RDBMS¥ADMIN ディレクトリに移動します。	8.1 より前のリリースでは、Oracle コンポーネントをインストールした場合、すべてのサブディレクトリは最上位の Oracle ホーム・ディレクトリの下に配置されました。デフォルトは、次のとおりでした。 Windows NT の場合、C:¥ORANT Windows 95 の場合、C:¥ORAWIN95 Windows 98 の場合、C:¥ORAWIN98 ユーザーが独自の Oracle ホームを設定することもできました。 このリリースは、Optimal Flexible Architecture（OFA）に準拠しているため、すべてのサブディレクトリが最上位の *ORACLE_HOME* ディレクトリの下にあるわけではありません。最上位ディレクトリの名前は *ORACLE_BASE* で、このディレクトリのデフォルトは C:¥ORACLE です。Oracle リリース 8.1.7 コンポーネントをクリーン・コンピュータ（他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータ）にインストールする場合、最初の Oracle ホーム・ディレクトリのデフォルト設定は、C:¥ORACLE¥ORA81 です。Oracle Universal Installer をもう一度実行してリリース 8.2.*x* をインストールする場合、2 番目の Oracle ホーム・ディレクトリの名前は ¥ORA82 です。これらの Oracle ホーム・ディレクトリは、*ORACLE_BASE* のすぐ下に配置されます。このドキュメントで例として使用されているディレクトリ・パスは、すべて OFA に準拠しています。 OFA 準拠の詳細および OFA に準拠していないディレクトリに Oracle 製品をインストールする方法は、『Oracle8*i* Client for Windows 管理者ガイド』を参照してください。

規則	例	意味
`%ORACLE_HOME%`	`SQL> @%ORACLE_HOME%¥ADMIN¥DB_NAME¥ADHOC¥CATALOG.SQL`	SQL*Plus コマンドでは %ORACLE_HOME% を使用できます。SQL*Plus は %ORACLE_HOME% 変数を使用して Oracle ホーム・ディレクトリを検索できます。この表記方法は、Server Manager、SQL*Plus、Export Utility および Import Utility で使用できます。
HOME_NAME	Oracle*HOME_NAME*TNSListener	Oracle ホーム名を示します。 ホーム名は英数字 16 文字までです。ホーム名で使用できる特殊文字はアンダースコアのみです。
HOME*ID*	HOME0、HOME1、HOME2	製品をインストールする各 Oracle ホーム・ディレクトリの一意なレジストリ・サブキーを示します。あるコンピュータ上の異なる Oracle ホーム・ディレクトリに製品をインストールするたびに、新しい HOME*ID* が作成されて増加します。各 HOME*ID* には、インストールされた Oracle 製品固有の構成パラメータが含まれます。
記号	ピリオド . カンマ , ハイフン - セミコロン ; コロン : 等号 = 円記号 ¥ 一重引用符 ' 二重引用符 " 丸カッコ ()	大カッコと垂直バー以外のコマンド内の記号は表記どおりに入力する必要があります。

1

Oracle8*i* Client の紹介

この章では、Oracle8*i* Client について説明します。

次の項目について説明します。

- サポートされるオペレーティング・システム
- Windows での新機能およびコンポーネント

サポートされるオペレーティング・システム

Oracle8*i* のクライアント・ソフトウェアは、次の Microsoft オペレーティング・システムのいずれかが稼働するパーソナル・コンピュータ（PC）で動作します。

- 次のものを含む Windows NT 4.0:
  - Windows NT Workstation 4.0
  - Windows NT Server 4.0
  - Windows NT Server, Enterprise Edition 4.0
- 次のものを含む Windows 2000:
  - Windows 2000 Professional
  - Windows 2000 Server
  - Windows 2000 Advanced Server
  - Windows 2000 Datacenter
- Windows 95
- Windows 98

参照： Windows Terminal Server での Oracle8*i* のサポートについては、『Oracle8*i* for Windows リリース・ノート』を参照してください。

Windows での新機能およびコンポーネント

この項では、Windows 上でリリース 8.1.7 および 8.1.6 で使用可能な新機能およびコンポーネントの一部を説明します。

8.1.7 の新機能

次の表では、Windows 上でのリリース 8.1.7 の新機能およびコンポーネントをいくつか説明します。

機能 / コンポーネント	説明	参照先
Oracle Provider for OLE DB の拡張	Oracle Provider for OLE DB は、次のサポートを提供しています。 ■ 複数の行セットを返す この機能を使用して、ストアド・プロシージャによって返されるすべての REF カーソルにアクセスできます。 ■ Unicode キャラクタ・セット この機能を使用して、同じクライアント・マシン上で複数の言語でデータにアクセスできます。この機能は、Unicode 標準に準拠するために多数の言語をサポートするグローバル・インターネット・アプリケーションの作成に役立ちますたとえば、Oracle8*i* データベースにアクセスする単一の active server page（ASP）を作成して、日本語、アラビア語、英語およびタイ語のコンテンツを動的に生成できます。	『Oracle Provider for OLE DB ユーザーズ・ガイド』
Oracle Objects for OLE（OO4O）の拡張	コマンドは、非同期処理を使用して実行できるようになりました。これにより、SQL 文および PL/SQL ブロックを非ブロック化モードで実行できます。非ブロック化モードでは、実行が完了していなくても、制御がすぐにアプリケーションに戻されます。これにより、アプリケーションは、最後の実行の結果に依存しない他のタスクを実行できます。	インストール後に「スタート」メニューで使用可能な OO4O のオンライン・ヘルプ
8.1.7 用の Oracle Universal Installer インストールに統合された新規コンポーネント	新規コンポーネントは、インストールに統合されています。 ■ Oracle XML Developer's Kit ■ Oracle XML SQL Utility ■ Oracle Workflow Builder ■ Oracle Workflow Mailer	■ 付録 A「インストール可能な個々のコンポーネント」 ■ 付録 B「個々のコンポーネントの説明」

8.1.6 の新機能

次の表では、Windows 上でのリリース 8.1.6 の新機能およびコンポーネントをいくつか説明します。

機能 / コンポーネント	説明	参照先
Oracle Provider for OLE DB	OLE DB はデータ・アクセス方法のオープン・スタンダードで、あらゆる型のデータにアクセスし操作するための一連のインタフェースを使用します。これらのインタフェースは、様々なデータベース提供元から入手できます。 Oracle Provider for OLE DB インタフェースは高速で、アプリケーション、コンパイラおよびその他のデータベース・コンポーネントからの Oracle データに対する効率のよいアクセスを提供します。	『Oracle Provider for OLE DB ユーザーズ・ガイド』
Active Directory サポート	Active Directory は、Windows 2000 に付属している LDAP（Lightweight Directory Access Protocol）準拠のディレクトリ・サーバーです。Active Directory には、ユーザー、グループおよびポリシーを含むすべての Windows 2000 情報が格納されます。 Oracle8*i* リリース 8.1.6 以上では、ユーザーはデータベース・サービス名および Net8 ネット・サービス名をディレクトリ・オブジェクトとして Active Directory に格納できます Active Directory との統合により、次のことが可能になります。 ■ データベースやネット・サービス名を表す Oracle オブジェクトが Active Directory に作成され、Oracle8*i* データベースへの接続時に様々な Oracle アプリケーションによって使用されます。 ■ ネット・サービス名情報を単一の集中化された場所に格納することで、個々のクライアント・コンピュータ上で別個の TNSNAMES.ORA ファイルを管理する必要がなくなります。 ■ 管理者は Oracle8*i* データベースに対するエンタープライズ・ユーザーとロールを作成し、Active Directory に格納することで、複数のデータベースに渡るユーザーやロールの管理を集中化できます。	『Oracle8*i* Client for Windows 管理者ガイド』の第 4 章「Active Directory での Oracle8*i* Client ディレクトリ機能の使用方法」

2

インストールの概要

この章では、Oracle コンポーネントのインストールの概要を説明します。

次の項目について説明します。

- Oracle Universal Installer
- インストールに使用できるインストール・タイプ
- Oracle Universal Installer コンポーネントのインストールの概要
- インストールの開始

Oracle Universal Installer

Oracle Universal Installer は、CD-ROM から Oracle コンポーネントをインストールするための Java ベースのグラフィカル・ユーザー・インタフェース（GUI）です。Oracle Universal Installer には、次の機能があります。

- コンポーネントおよびコンポーネント・セットのインストール
- Web ベースのインストール
- 各国語およびグローバル化のサポート
- 分散インストール・サポート（Oracle Parallel Server）
- レスポンス・ファイルを使用した（対話を必要としない）サイレント・インストール
- インストール済コンポーネントの削除
- 複数の Oracle ホームのサポート

参照： Oracle Universal Installer の詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』を参照してください。このガイドは、Oracle Universal Installer のインストール時に自動的にハードディスク・ドライブにインストールされます。このマニュアルを表示するには、「スタート」→「プログラム」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer Concepts Guide」を選択します。

インストールに使用できるインストール・タイプ

コンポーネント CD-ROM から Oracle Universal Installer を実行する際、4 つの異なるインストール・タイプから Oracle8*i* Client コンポーネントを選択できます。各インストール・タイプは、個別にインストールできる一連のコンポーネントを含んでいます。次の表に、4 つのインストール・タイプを示します。

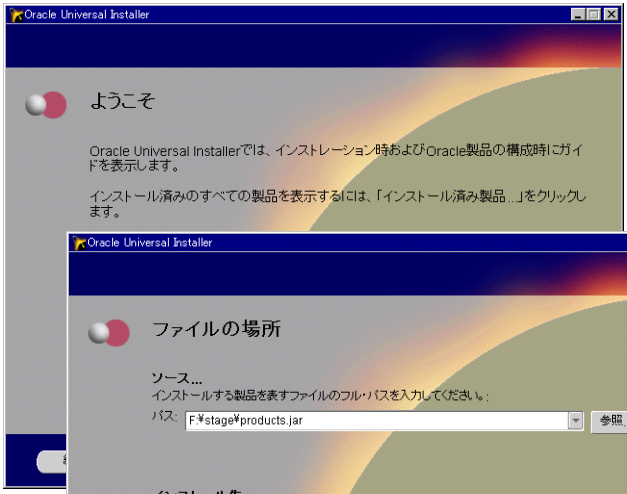
インストール・タイプ	説明
管理者	Oracle Enterprise Manager コンソール（Enterprise Management Tools を含む）、ネットワーキング・サービス、ユーティリティおよび基本クライアント・ソフトウェアをインストールします。
プログラマ	Oracle8*i* データベースにアクセスするアプリケーションを作成するための開発ツール（プリコンパイラを含む）とインタフェースをインストールします。

インストール・タイプ	説明
アプリケーション・ユーザー	データベース・アプリケーションのユーザーが、Oracle8*i* データベースに接続して対話できるようにするネットワーキング・サービスとサポート・ファイルをインストールします。
カスタム	上のインストール・タイプからコンポーネントを選択してインストールできます。

参照： 各インストール・タイプでインストールされる個々のコンポーネントのリストは、付録 A「インストール可能な個々のコンポーネント」を参照してください。

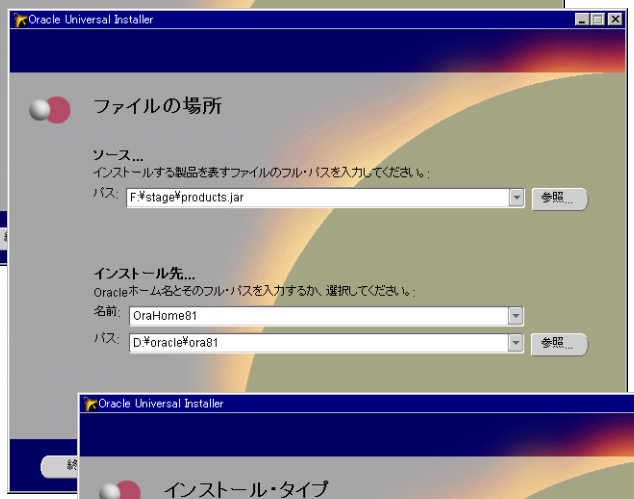
Oracle Universal Installer コンポーネントのインストールの概要

コンポーネント CD-ROM から Oracle Universal Installer を実行すると、次のウィンドウが表示され、Oracle コンポーネントをインストールできます。ここでは、コンポーネントのインストールの選択肢の概要を説明します。特定のインストール手順は、第 5 章「Oracle コンポーネントおよびドキュメントのインストール」に記載されています。



最初のウィンドウ：「ようこそ」

Oracle Universal Installer にようこそ。



2 番目のウィンドウ：「ファイルの場所」

「インストール先」フィールドに次の項目を入力できます。

- Oracle ホーム名
- Oracle コンポーネントをインストールするディレクトリ位置

コンポーネント CD-ROM から Oracle Universal Installer を実行している場合、「ソース」フィールドには CD-ROM の位置が自動的に表示されます。このフィールドは変更しないでください。

3 番目のウィンドウ： インストール・タイプ

インストールする最上位コンポーネントを選択できます。

- 管理者
- プログラマ
- アプリケーション・ユーザー
- カスタム

インストールの開始

インストール処理を始める準備ができました。迅速に作業を開始するには、次にリストした章に、この順序で正確に従います。

目的	参照先
次の事項のインストール要件を調べる ■ 個々のインストール・タイプ ■ 個々のコンポーネント ■ 単一 Oracle ホーム・コンポーネント ■ ネットワーク・プロトコルおよびベンダー	第 3 章「インストール要件」
Net8 クライアント / サーバー環境を作成する方法を選択する	第 4 章「Net8 構成方法の選択」
Oracle コンポーネントをインストールする	第 5 章「Oracle コンポーネントおよびドキュメントのインストール」

3

インストール要件

この章ではインストールの要件を説明します。

次の項目について説明します。

- FAT および NTFS ファイル・システムのシステム要件
- Oracle8i Client
- 移行とアップグレードの要件
- 個々のコンポーネントの必須要件
- 単一 Oracle ホーム・コンポーネント
- ネットワーク・プロトコル・ベンダーの要件

FAT および NTFS ファイル・システムのシステム要件

この章では、File Allocation Table（FAT）および NT File System（NTFS）の両方のファイル・システムのシステム要件をリストします。必要な値は、デフォルトのブロック・サイズが 32K の FAT ファイル・システムおよびデフォルトのブロック・サイズが 2K の NTFS ファイル・システムの 2GB のパーティションへのインストールから取得されました。両方のファイル・システムは領域割当てが異なるので、ハード・ディスク要件は異なります。

重要： この項にリストする FAT および NTFS システム要件を検討すると、インストールに十分なハード・ディスク容量があるかどうかを判断できます。これらの値は、Oracle Universal Installer の「インストール・タイプ」ウィンドウおよび「サマリー」ウィンドウでレポートされるハード・ディスク値よりも正確です。これらのウィンドウには、次の情報が含まれていません。

- 正確な FAT ディスク容量の値
- ハードディスク・ドライブ上に展開される圧縮ファイルのサイズ

Oracle8*i* Client

「Oracle8*i* Client」最上位コンポーネントは、次のインストール・タイプで構成されます。

- 管理者
- プログラマ
- アプリケーション・ユーザー
- カスタム

次に、「管理者」、「プログラマ」および「アプリケーション・ユーザー」のシステム要件を示します。「カスタム」の場合の要件は、インストール用に選択するコンポーネントに依存します。

要件	管理者[1]	プログラマ	アプリケーション・ユーザー
オペレーティング・システム	Windows NT 4.0、Windows 95、Windows 98 および Windows 2000	Windows NT 4.0、Windows 95、Windows 98 および Windows 2000	Windows NT 4.0、Windows 95、Windows 98 および Windows 2000
Windows NT 4.0 Service Pack	5.0 以上で認定	5.0 以上で認定	5.0 以上で認定
動作可能プロセッサ	Pentium 166MHz	Pentium 133MHz	Pentium 133MHz
推奨プロセッサ	Pentium 266MHz	Pentium 166MHz	Pentium 166MHz

要件	管理者[1]	プログラマ	アプリケーション・ユーザー
RAM	64MB（最小） 128MB（推奨）	32MB（64MB を推奨）	32MB（64MB を推奨）
FAT ファイル・システム :			
■ Oracle ホーム・ドライブ	861MB	270MB	180MB
■ システム・ドライブ	51MB	40MB	36MB
NTFS ファイル・システム :			
■ Oracle ホーム・ドライブ	336MB	192MB	120MB
■ システム・ドライブ	51MB	40MB	36MB
Web ブラウザ（Oracle Enterprise Manager Web Site を使用している場合）	■ Netscape Navigator 4.7 以上 ■ Microsoft Internet Explorer 5.0 以上	なし	なし

[1] Oracle Enterprise Manager Client のオペレーティング・システム、サービス・パック、プロセッサおよび RAM の要件は、Oracle Enterprise Manager Web Site の要件と同じです。

参照： 各インストール・タイプでインストールされる個々のコンポーネントのリストは、A-2 ページの「Oracle8i Client のコンポーネント」を参照してください。

移行とアップグレードの要件

このドキュメントでは、Oracle データベースの移行とアップグレードの要件は説明していません。その要件については、『Oracle8*i* 移行ガイド』を参照してください。

個々のコンポーネントの必須要件

次の表に、インストール前に個々のコンポーネントが満たすべき必須要件を示します。各インストール・タイプでどのコンポーネントをインストールできるかは、付録 A「インストール可能な個々のコンポーネント」を参照してください。インストール前の一連の手順に関する適切なドキュメントも併記してあります。

コンポーネント	説明	参照
Oracle Advanced Security	Oracle コンポーネントで認証サポートを使用するには、ハードウェア要件およびソフトウェア要件を満たす必要があります。また、Oracle Advanced Security を Secure Socket Layer（SSL）および Private Key Infrastructure（PKI）とともに使用するには、コンポーネント CD-ROM で提供されている Oracle Internet Directory などの LDAP ディレクトリが事前にインストールされている必要があります。	『Oracle8*i* Advanced Security 管理者ガイド』の第 1 章
Oracle Enterprise Manager Paging Server	Oracle Enterprise Manager 管理者がイベントとジョブのステータス変更のページング通知を受信するようにする場合は、外線にダイアルできるように構成されたモデムが搭載されている Windows NT または Windows 2000 コンピュータに Oracle Enterprise Manager Paging Server をインストールします。	『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』
Oracle Workflow Builder および Mailer	必要なハードウェアおよびソフトウェアが構成されていることを確認します。	『Oracle8*i* Workflow インストレーション補足』
Active Directory との Oracle8*i* の統合	Oracle8*i* のインストールを実行するユーザーは、正常に統合するためのインストール前の要件を実行する必要があります。	『Oracle8*i* Client for Windows 管理者ガイド』の第 4 章「Active Directory での Oracle8*i* Client ディレクトリ機能の使用方法」
Recovery Manager （Oracle Utilities の一部）	Recovery Manager を使用してディスク以外のメディアにバックアップする場合、Legato Storage Manager（LSM）Server などのメディア管理レイヤーが必要です。LSM Server は CD-ROM に収録されています。LSM Server では、次のシステム構成が必要です。 ■ 動作可能プロセッサ： Intel Pentium 200MHz ■ 推奨プロセッサ： Intel Pentium 450MHz 以上 ■ RAM: 128MB ■ ハード・ディスク： 64MB ■ Windows NT および Windows 95/98 のバックアップ： その他にバックアップ・データ合計の 5% またはオンライン索引用として 100MB	『Oracle8*i* Legato Storage Manager 管理者ガイド』

単一 Oracle ホーム・コンポーネント

ほとんどの Oracle コンポーネントは、同じコンピュータに複数回インストールできます。ただし、次のコンポーネントは、コンピュータあたり 1 回のみインストールできます。

- Oracle Objects for OLE
- Oracle ODBC（Open Database Connectivity）Driver
- Oracle Provider for OLE DB

これらのコンポーネントを 2 回目にインストールしようとすると、Oracle Universal Installer は、これらの製品が別の Oracle ホームにインストール済であることを検出し、プロンプトを表示しないでこれらの製品をインストール・プロセスから自動的に削除します。*X*:¥PROGRAM FILES¥ORACLE¥INVENTORY¥LOGS ディレクトリの INSTALLACTIONS.LOG ファイルに次の情報が記録されます。

```
# product_name is a single oracle home product. It is already installed in
currently_installed_location.
```

インストールを実行しているときに、1 つ以上の単一 Oracle ホーム・コンポーネントが現在のセッションでインストールできないことに気づいた場合は、これらのコンポーネントのいずれか、またはこれらのコンポーネントの古いバージョンが、別の Oracle ホームにインストールされていないかをチェックします。これらのコンポーネントを現在選択している Oracle ホームにインストールする場合は、競合するバージョンを最初に削除する必要があります。

> **参照：** これらのコンポーネントがインストールされるインストール・タイプは、付録 A「インストール可能な個々のコンポーネント」を参照してください。

ネットワーク・プロトコル・ベンダーの要件

次の表に、各ネットワーク・プロトコルをサポートしているベンダーを示します。

Net8 プロトコル機能	プラットフォーム	サポートしているベンダー
TCP/IP プロトコル	Windows NT および Windows 95/98	Microsoft TCP/IP
SPX プロトコル	Windows NT および Windows 95/98	■ Microsoft NW Link for Windows NT、Windows 95/98 ■ Novell NetWare Client 32 release 4.1 ■ Novell IntranetWare Client release 4.1 for Windows NT ■ Novell IntranetWare Client release 2.2 for Windows 95 **注意：** Microsoft NW Link の場合は、Client Service for NetWare がインストールされている必要があります。
Named Pipes プロトコル	Windows NT および Windows 95/98	Microsoft NETBEUI
ホスト・ネーミング・メソッド	Windows NT	Microsoft TCP/IP
NDS ネーミング・メソッド	Windows NT および Windows 95	■ Novell NetWare Client 32 release 4.1 ■ Novell IntranetWare Client release 4.1 for Windows NT ■ Novell IntranetWare Client release 2.2 for Windows 95 **注意：** NetWare release 4.1 には Oracle Server リリース 7.2.2 以降が必要です。
NDS 認証メソッド	Windows NT および Windows 95	■ Novell NetWare Client 32 release 4.1 ■ Novell IntranetWare Client release 4.1 for Windows NT ■ Novell IntranetWare Client release 2.2 for Windows 95 **注意：** NetWare release 4.1 には Oracle Server リリース 7.2.2 以降が必要です。
Windows 固有の認証方法	Windows NT および Windows 95/98	Microsoft

4

Net8 構成方法の選択

この章では、インストール中に使用できる Net8 クライアント / サーバー構成の方法を説明します。インストールを実行する前に、これらの方法を理解する必要があります。

次の項目について説明します。

- ネットワーク構成方法
- Net8 構成方法の選択

注意： この章では、聞き慣れないネットワーク用語および概念を使用している場合があります。この章で使用される用語の定義は「用語集」を、概念の詳細は『Oracle8*i* Net8 管理者ガイド』を参照してください。

ネットワーク構成方法

Oracle Universal Installer は、インストール中に Net8 クライアント / サーバー・ネットワーキング環境の構成方法をいくつか提供しています。

インストール中に選択する方法は、次の条件に依存します。

- ネットワーク構成に関するユーザー自身の知識
- ネットワーク環境の要件

インストールを開始する前に、これらの方法を理解する必要があります。この章の情報に目を通すことで、必要に応じた最善のネットワーキング環境を最初から構成することが可能です。

Net8 コンポーネントは、いくつかのインストール・タイプでインストールされます。この表のインストール・タイプで、インストール中にネットワーク構成にユーザーが入力する必要のある項目を確認してください。◎印は、インストール中に入力を要求されるかどうか（なし、最小、多量）を示しています。どのような情報が自動的に作成され、どのような情報を手動で入力する必要があるかについての個々の詳細は、この章の後の項を参照してください。

インストール・タイプ	データベースの作成に必要なユーザー入力			Net8 の構成に必要なユーザー入力		
	なし	最小	多量	なし	最小	多量
Oracle8*i* Client						
■ 管理者		該当せず			◎	
■ プログラマ		該当せず			◎	
■ アプリケーション・ユーザー		該当せず			◎	
■ カスタムで次を選択 :						
Net8 Client[1]		該当せず			◎	◎

[1] 「カスタム」インストール・タイプで Net8 Client を選択すると、最小限のユーザー入力を必要とする構成を作成するか、ユーザー入力を多量に必要とする構成を作成するかを尋ねられます。

Net8 構成方法の選択

Net8 Configuration Assistant は、Oracle クライアントが Oracle8*i* データベースに接続できるようなネットワーク環境の構成を可能にするツールです。Net8 Configuration Assistant は、大部分のインストール・タイプで、Oracle Universal Installer から自動的に起動でき、独立したツールとして手動でも起動できます。

注意： この章では、Oracle Universal Installer からの Net8 Configuration Assistant の実行を説明します。スタンドアロン・モードでの Net8 Configuration Assistant の実行については、『Oracle8*i* Net8 管理者ガイド』または Net8 Configuration Assistant のオンライン・ヘルプを参照してください。スタンドアロン・モードでのこのツールの起動手順は、『Oracle8*i* Client for Windows 管理者ガイド』の第 2 章「データベース・ツールの概要」を参照してください。

選択したインストール・タイプに応じて、Net8 Configuration Assistant は、次の 2 つの方法のいずれかでネットワークを構成します。

- 標準のデータベース接続方法用にネットワークを自動的に構成
- ユーザーに入力を要求して、カスタマイズされたネットワークを作成

構成作業は、*ORACLE_BASE*¥*ORACLE_HOME*¥NETWORK¥ADMIN ディレクトリにある一連のネットワーク・ファイルの作成と変更で成り立ちます。

クライアントのネットワーク構成

次に、クライアントのインストール・タイプで作成されるネットワーク構成の種類と、必要とされるユーザー入力を示します。これらの選択肢を確認して、自分の要件やネットワーク構成の知識に最も適したネットワーク構成を特定してください。

実行手順	結果
1. 「Oracle8*i* Client」を選択します。	Net8 Configuration Assistant により、まず次の方法のいずれかを選択するよう要求されます。この方法により、Oracle8*i* データベースへのアクセスが構成されます。
2. 「管理者」、「プログラマ」または「アプリケーション・ユーザー」を選択します。	■ ディレクトリ・ネーミング ディレクトリ・サーバー。 ■ ローカル・ネーミング ネット・サービス名により、クライアントを Oracle8*i* データベースに接続できます。 選択内容に応じて、追加情報を入力するよう要求されます。 続いて Net8 Configuration Assistant が次のファイル内に情報を構成して、Net8 クライアント環境を自動的に作成します。 ■ LDAP.ORA ファイル（上でディレクトリ・ネーミングが選択された場合） ディレクトリ・サーバー・タイプを識別してディレクトリ・サーバー・アクセスを構成します。ディレクトリ位置と管理コンテキストも識別できます。クライアントは、このコンテキストからネット・サービス名を参照できます。 ■ TNSNAMES.ORA ファイル ネット・サービス名（上でローカル・ネーミング・メソッドが選択された場合）を構成します。 ■ SQLNET.ORA ファイル クライアントのドメインをデフォルト・ドメイン（コンピュータが置かれているドメイン）として構成します。このドメインは、接続文字列で指定される未修飾のネット・サービス名に自動的に付加されます。 クライアントが名前を接続記述子に解決するために使用するネーミング・メソッドを構成します。

実行手順	結果
1. 「Oracle8*i* Client」を選択します。 **2.** 「カスタム」を選択します。 **3.** 「Net8 Client」を選択します。	Net8 Configuration Assistant により、まず次のことを要求されます。 ■ 完全なディレクトリ・サーバー・アクセス構成。ディレクトリ・サーバーのタイプと位置、クライアントがネット・サービス名を参照、作成および変更できる管理コンテキストの入力を含みます。[1] ■ データベースへの接続に使用するネーミング・メソッドを選択します。たとえば、ローカル・ネーミング・メソッドを選択すると TNSNAMES.ORA ファイルを使用できるようになります。選択内容に応じて、追加情報を入力するよう要求されます。ローカル・ネーミング・メソッドの場合は、ネット・サービス名、データベース SID、使用するネットワーク・プロトコルの入力を要求されます。 続いて Net8 Configuration Assistant が次のファイル内に情報を構成して、Net8 クライアント環境を自動的に作成します。 ■ SQLNET.ORA ファイル オペレーティング・システム認証済接続（OPS$）を要求するようクライアントを構成します。 クライアントのドメインをデフォルト・ドメイン（コンピュータが置かれているドメイン）として構成します。このドメインは、未修飾の名前に自動的に付加されます。 クライアントが名前を接続記述子に解決するために使用するネーミング・メソッドを構成します。 ■ TNSNAMES.ORA ファイル ネット・サービス名（Oracle8*i* データベースに接続するために上でローカル・ネーミング・メソッドが選択された場合）を構成します。 ■ LDAP.ORA ファイル（上でディレクトリ・アクセス構成が選択された場合） ディレクトリ・サーバー・タイプを識別してディレクトリ・サーバー・アクセスを構成します。ディレクトリ位置と管理コンテキストも識別できます。

[1] この Oracle ホームがディレクトリ・サーバー・アクセス用に構成されていない場合に、この情報の入力を要求されます。

5

Oracle コンポーネントおよびドキュメントのインストール

この章では、Oracle コンポーネントのインストール方法を説明します。

次の項目について説明します。

- Windows NT と UNIX でのインストールの相違
- キーボード・ナビゲーション
- インストール前の作業
- Oracle8i Client のインストール

Windows NT と UNIX でのインストールの相違

UNIX 環境で Oracle コンポーネントをインストールした経験のあるデータベース管理者は、UNIX で必要な手動セットアップ作業の多くが、Windows オペレーティング・システムでは必要ないことに注意する必要があります。たとえば、Windows オペレーティング・システムでは次の作業を手動で行う必要はありません。

- 環境変数の設定
- データベース管理者用の UNIX DBA グループの作成
- Oracle Universal Installer を実行しているユーザー用の UNIX グループの作成
- Oracle コンポーネントのインストールとアップグレード専用の UNIX アカウントの作成

Windows オペレーティング・システムで必要なインストール前の作業はすべてこの章で説明します。

キーボード・ナビゲーション

このガイドでは、マウスを使用して Oracle Universal Installer ウィンドウをナビゲートする方法を説明します。キーボード・コマンドを使用してナビゲートすることもできます。Windows オペレーティング・システムには、Oracle Universal Installer で使用できる一連のキーボード・コマンドがあります。たとえば、[Tab] キーを使用して、ウィンドウの項目から項目へナビゲートできます。Oracle Universal Installer には、階層ツリーのコンポーネントをナビゲートする必要のあるウィンドウがいくつか含まれています。これらのウィンドウには、次のものがあります。

- 「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウ（インストールできるコンポーネントのリスト）
- 「サマリー」ウィンドウ（インストールしようとしているコンポーネントのリスト）
- 「インベントリ」ウィンドウ（インストールされているコンポーネントのリスト）

次の表に、これらのウィンドウをキーボード・コマンドを使用してナビゲートする方法を説明します。

目的	使用するキー
コンポーネントのリストを上下に移動します。	上矢印および下矢印
拡張可能なコンポーネント・ツリーを開きます。	右矢印
拡張可能なコンポーネント・ツリーを閉じます。	左矢印
コンポーネントを選択または選択解除します。	スペース・バー

参照： 標準のキーボード・ナビゲーション・コマンドは、Microsoft の Web サイトを参照してください。

`http://www.microsoft.com`

インストール前の作業

Oracle コンポーネントをインストールする前に、次の作業を実行します。

注意： 最初に Windows 95 または 98 に Oracle をインストールした後は、コンピュータを再起動します。その後のインストールでは、Oracle ホームを変更した場合にのみ再起動する必要があります。

インストール前の作業を実行するには、次の手順に従います。

1. インストールを開始する前に、必ず第 3 章「インストール要件」にある適切なシステム要件やコンポーネント要件を確認し、これを満たします。
2. オペレーティング・システムを起動します。
3. Windows NT にインストールする場合は、Oracle コンポーネントをインストールするコンピュータに対する Administrators グループのメンバーとしてログオンします。

注意： 環境に手動で ORACLE_HOME を設定しないでください。ORACLE_HOME はレジストリに自動的に設定されます。環境に ORACLE_HOME を設定する必要はなく、お薦めできません。設定すると、複数の Oracle ホーム環境が正しく機能しなくなります。詳細は、『Oracle8*i* Client for Windows 管理者ガイド』の第 3 章「複数の Oracle ホームおよび Optimal Flexible Architecture」を参照してください。

---

4. 使用するネットワーク・ハードウェアおよびソフトウェアは、必要に応じてインストールおよびテストしておきます。
5. Oracle コンポーネントをインストールする Oracle ホームに対する Oracle サービスが実行されていれば、すべて停止します。
   - **a.** 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「サービス」を選択します。
   - **b.** 「開始」の状態の Oracle サービス（Oracle で始まる名前）があればそのサービスを選択し、「停止」を選択します。
   - **c.** 「閉じる」を選択して、「サービス」ウィンドウを閉じます。

6. コンポーネント CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。

   「Autorun」ウィンドウが自動的に表示されます。「Autorun」ウィンドウが表示されない場合は、次の操作を行います。

   a. 「スタート」→「実行」を選択します。

   b. 次のコマンドを入力します。

      DRIVE_LETTER:¥AUTORUN¥AUTORUN.EXE

      「Autorun」ウィンドウが表示されます。

7. Oracle コンポーネントのインストール手順は、5-4 ページの「Oracle8i Client のインストール」を参照してください。

Oracle8*i* Client のインストール

Oracle8*i* コンポーネントをインストールするには、次の手順に従います。

注意： 古い Oracle Installer（リリース 7.*x* や 8.0.*x* とともに出荷された Oracle Universal Installer 前のもの）を使用した、リリース 8.1 Oracle ホーム・ディレクトリへのコンポーネントのインストールは、サポートされません。同様に、リリース 8.1.7 のコンポーネントは、リリース 7.*x*、8.0.*x*、8.1.3 または 8.1.4 の Oracle ホームにはインストールできません。

注意： Oracle Universal Installer により、JRE（Java Runtime Environment）の Oracle バージョンが自動的にインストールされます。このバージョンは、Oracle Universal Installer およびいくつかの Oracle Assistant を実行する必要があります。オラクル社カスタマ・サポート・センターの提供するパッチ以外で JRE を変更しないでください。

Oracle コンポーネントをインストールするには、次の手順に従います。

1. 5-3 ページの「インストール前の作業」で説明されるインストール前の手順に従っていることを確認します。

2. 「Autorun」ウィンドウから「インストールを開始」を選択します。

   「ようこそ」ウィンドウが表示されます。

3. 「次」を選択します。

   「ファイルの場所」ウィンドウが表示されます。「ソース」フィールド内のディレクトリ・パスは変更しないでください。これは、インストール用のファイルの CD-ROM 上の位置です。

4. 「インストール先」フィールドに、Oracle コンポーネントをインストールする Oracle ホーム名とディレクトリ・パスを入力します。

   ホーム名の長さは最大 16 文字で、英数字とアンダースコアのみを含める必要があります。デフォルトのディレクトリ・パスは、
   < 空き領域が最大のドライブ >:¥ORACLE¥ORA81 です。空白を含めることはできません。

   注意： 8.1.*x* の前のリリースで作成した Oracle ホームがある場合は、デフォルトのインストール位置を別の場所に変更する必要があります。

5. 「次」を選択します。

   「インストール・タイプ」ウィンドウが表示されます。

6. インストールするインストール・タイプを選択し、「次」を選択します。

7. 手順 6 で行った選択に基づいて、適切な項目を参照してください。

選択したオプション	参照先
「管理者」、「プログラマ」、「アプリケーション・ユーザー」	5-5 ページの「「管理者」、「プログラマ」、「アプリケーション・ユーザー」」
カスタム	5-6 ページの「カスタム」

「管理者」、「プログラマ」、「アプリケーション・ユーザー」

「サマリー」ウィンドウが表示されます。

1. 領域要件を検討して十分なディスク領域があることを確認し、「インストール」を選択します。

2. 選択したコンポーネントがインストールされるのを待ちます。

   現在指定されている Oracle ホームに Net8 Client リリース 8.1.7 がインストールされていない場合は、「構成ツール」ウィンドウが表示され、Net8 Configuration Assistant が起動し、Oracle8*i* データベースへのクライアント・アクセスを構成する方法を選択するよう要求されます。この Oracle ホームにインストールされている Net8 Client リリース 8.1.6 以前はアップグレードされます。

3. Oracle8*i* データベースへのクライアント・アクセスの構成方法を選択します。選択の詳細は、オンライン・ヘルプおよび 4-4 ページの「クライアントのネットワーク構成」を参照してください。

   「インストールの終了」ウィンドウが表示されます。

4. 「終了」を選択して Oracle Universal Installer を終了するか、「次のインストール」を選択して別のコンポーネントをインストールします。

   参照： インストール・セッションのサマリーは、5-8 ページの「インストール・セッションのログの確認」を参照してください。

カスタム

5-5 ページの手順 6 で「カスタム」を選択した場合は、「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウが表示されます。「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウの「インストール状況」列には、インストールに使用できるすべてのコンポーネントの状態が表示されます。

状態	コンポーネントの状態
インストール済	すでにインストールされています。
新規インストール	インストールするよう初めて選択されました。
未インストール	現在インストールされておらず、インストールするよう選択されてもいません。
再インストール	現在インストールされていますが、再インストールするよう選択されています。
アップグレード	現在インストールされていますが、アップグレードされます。

1. インストールするコンポーネントに対応するチェック・ボックスがチェックされていることを確認します。

   注意： インストールするコンポーネントを選択または選択解除する場合は注意してください。チェック・ボックスがチェックされていないと、コンポーネントはインストールされません。

2. インストールするコンポーネントを適宜選択し、「次」を選択します。

   「コンポーネントの場所」ウィンドウが表示され、いくつかのコンポーネントをインストールする代替位置を選択できます。

3. デフォルト位置を受け入れるには、「次」を選択します。そうでない場合は、コンポーネントを選択して、デフォルト位置を変更するためのテキスト・ボックスを使用可能にし、「次」を選択します。

4. 次のコンポーネントのいずれかを選択した場合は、要求に応じて適切な応答を入力します。大部分のコンポーネントは、追加情報の入力を要求されることなくインストールされることに注意してください。

選択したオプション	要求の有無
Net8 Client	情報の入力は要求されません。ただし、インストールの最後に Net8 Configuration Assistant が起動し、現在指定されている Oracle ホームに Net8 Client リリース 8.1.7 がインストールされていない場合は Oracle8*i* データベースへのクライアント・アクセスを構成するよう要求されます。 **注意：** この Oracle ホームにインストールされている Net8 Client リリース 8.1.6 以前はアップグレードされます。 **参照：** 実行される構成手順の詳細は、4-4 ページの「クライアントのネットワーク構成」を参照してください。
Oracle Advanced Security	Oracle でサポートする認証方式を選択するよう要求されます。選択項目として、Kerberos、SecurID および Radius が自動的に表示されます。Identix、CyberSafe および Entrust は、適切なサードパーティ・ソフトウェアがインストールされている場合にのみ表示されます。
Oracle Protocol Support	Oracle でサポートを提供するネットワーク・プロトコル・アダプタを選択するよう要求されます。このウィンドウの「Status」列の説明は、オンライン・ヘルプを参照してください。
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	インストール後に Microsoft Transaction Server をインストールするよう要求されます（現在インストールされていない場合）。

「サマリー」ウィンドウが表示されます。

5. 領域要件を検討して十分なディスク領域があることを確認し、「インストール」を選択します。

6. 選択したコンポーネントがインストールされ、構成ツールが実行を完了するまで待ちます。

「インストールの終了」ウィンドウが表示されます。

7. 「終了」を選択して Oracle Universal Installer を終了するか、「次のインストール」を選択して別のコンポーネントをインストールします。

参照： インストール・セッションのサマリーは、5-8 ページの「インストール・セッションのログの確認」を参照してください。

インストール・セッションのログの確認

最後のインストール・セッションで実行された作業とインストールされたコンポーネントを記述するログは、次の場所にあります。

```
X:¥PROGRAM FILES¥ORACLE¥INVENTORY¥LOGS¥INSTALLACTIONS.LOG
```

X は、オペレーティング・システムが配置されているハードディスク・ドライブです。

INSTALLACTIONS.LOG は、最新のログ・ファイルです。前のインストール・セッションのログ・ファイルもこのディレクトリにあり、その名前の形式は INSTALLACTIONS*DATE_TIME*.LOG（たとえば、INSTALLACTIONS1999-07-14_09-00-56-AM.LOG など）です。

Oracle Universal Installer の任意のウィンドウで「インストール済みの製品」を選択すると、インストール済のコンポーネントのリストを表示できます。インストールされたプログラムのウィンドウが表示されます。

Web ブラウザおよび Adobe Acrobat Reader のインストール

Web ブラウザおよび Adobe Acrobat Reader をインストールすると、すべてのドキュメント形式と機能を利用できます。

Web ブラウザおよび Adobe Acrobat Reader をインストールするには、次の手順に従います。

1. 次の Web ブラウザと Adobe Acrobat Reader がインストールされていることを確認します。

ツール	使用するバージョン

Web ブラウザ	Java 対応の次のブラウザの 1 つを使用します。
	■ Netscape Navigator バージョン 3.0 以降
	`http://www.netscape.com`
	■ Microsoft Internet Explorer バージョン 3.0 以降
	`http://www.microsoft.com`
	注意： Oracle Information Navigator が使用できるのは、Java 対応のブラウザのみです。

ツール	使用するバージョン
Adobe Acrobat Reader	Adobe Acrobat Reader リリース 3.0 以降。このコンポーネントは、2 つの場所から入手できます。 **コンポーネント CD-ROM から :** **1.** コンポーネント CD-ROM の ¥ACROREAD ディレクトリに移動します。 **2.** 「AR405JPN.EXE」をダブルクリックします（または、MS-DOS コマンド・プロンプトから AR405JPN.EXE を実行します）。 ウィザードが、Adobe Acrobat Reader のインストールを順を追って指示します。 **Adobe Web サイトから :** `http://www.adobe.com`

Web ブラウザでのドキュメントの表示

Web ブラウザと Adobe Acrobat Reader の両方がインストールされている場合は、Web ブラウザから HTML および PDF ドキュメントを表示できます。

Web ブラウザからドキュメントを表示するには、次の手順に従います。

1. 5-8 ページの「Web ブラウザおよび Adobe Acrobat Reader のインストール」の手順に従います。
2. 「スタート」→「プログラム」→「Oracle - *HOME_NAME*」→「Documentation Library」を選択します。

   Web ブラウザが自動的に起動し、ドキュメント・カテゴリがリストされた「ようこそ」ページが表示されます。

   しばらくして Oracle Information Navigator も表示されます。
3. ほとんどのドキュメントは、HTML 形式と PDF 形式の両方で表示できます。
4. Oracle Information Navigator の使用手順についてのヘルプにアクセスするには、疑問符アイコンを選択します。

Web ブラウザがない場合のドキュメントの表示

Web ブラウザがインストールされていない場合でも、Adobe Acrobat Reader がインストールされていれば PDF 形式のドキュメントを表示できます。

Web ブラウザを使用しないでドキュメントを表示するには、次の手順に従います。

1. Acrobat Reader または Acrobat Exchange を開きます。
2. 「ファイル」→「開く」メニュー・オプションを選択します。
3. 必要に応じて次のドキュメントを選択します。

表示する対象	操作
すべての PDF ドキュメントの目次	**1.** ¥DOC ディレクトリに移動します。 **2.** 「INDEX.PDF」をダブルクリックします。 すべてのカテゴリの最上位ライブラリが表示されます。 **3.** カテゴリを選択して、個々のドキュメントのリストを表示します。
目次を表示しないで個々の PDF ファイルを直接表示	**1.** ¥DOC ディレクトリに移動します。 **2.** 適切なサブディレクトリに移動します（たとえば、WIN.817 には、Windows 用の Oracle ドキュメントが含まれています）。 **3.** 表示するファイルをダブルクリックします。PDF ファイルには、各ガイドのタイトル・ページにある部品番号に基づいて名前が付けられています（たとえば、A12345.PDF など）。

個々の PDF ファイルには、しおりの一覧の一番上に「PDF Directory」というしおりが含まれています。このしおりを選択すると、個々のファイルが位置する 1 レベル上の目次に移動します。

注意： Adobe Acrobat Reader でドキュメントをいくつか開いた後、さらにドキュメントを開こうとすると、ドキュメントが存在しないというエラー・メッセージが表示される場合があります。このエラー・メッセージはメモリーが少ないために発生します。問題を解決するには、使用していないドキュメントが開いている場合は閉じてから続行します。

6

インストール後の構成作業

この章では、インストール後の構成作業を説明します。この章では適宜、これらの構成作業の実行手順に関する他のガイドを参照しています。

次の項目について説明します。

- NTFS ファイル・システムと Windows NT レジストリ権限の設定
- 個々のコンポーネントのインストール後の構成作業

NTFS ファイル・システムと Windows NT レジストリ権限の設定

Oracle8*i* データベースのファイル、ディレクトリおよびレジストリの設定は、認証されたデータベース管理者（DBA）のみが完全に制御できるように構成することをお薦めします。次の項目では、これらの作業の実行方法を説明します。

- NTFS ファイル・システムのセキュリティ
- Windows NT レジストリのセキュリティ

参照： NTFS ファイル・システムと Windows NT レジストリの設定値の変更の詳細は、Windows NT のドキュメントを参照してください。

NTFS ファイル・システムのセキュリティ

Oracle8*i* データベースでは、ファイルを使用してデータベース・データ、バックアップ・データ、ログ情報などを格納します。このため、Oracle8*i* データベース・プロセスはセキュリティ・アカウントの下で実行されます。このセキュリティ・アカウント（システムと呼ばれる Windows NT LocalSystem アカウント）には、これらのファイルを作成、アクセスする機能が含まれています。セキュリティ・アカウントは、「コントロール パネル」で Oracle8*i* データベースの使用するサービスに割り当てます。このアカウントには、ファイルの作成、読込み、書込み、削除および実行のすべてのファイル・システム権限が必要です。

認証されたユーザーのみがすべてのファイル・システム権限を持つことを保証するには、次の手順に従います。

1. Windows NT エクスプローラを表示します。
2. Oracle8*i* のデータベース・ファイル（*ORACLE_BASE*¥ORADATA¥*DB_NAME* ディレクトリ）、実行可能ファイル、動的リンク・ライブラリ（*ORACLE_BASE*¥*ORACLE_HOME*¥BIN ディレクトリ）およびディレクトリを右クリックします。
3. 表示されるメニューから「プロパティ」を選択します。
4. 次の条件を保証するように、ファイルやディレクトリの権限を調整します。
   - Oracle8*i* データベースが使用するよう構成されているセキュリティ・アカウントのみが、これらのファイルに対するすべての制御権限を持つようにします。
   - Oracle アプリケーション（たとえば、SQL*Plus、Server Manager、Pro*C など）を実行する必要のあるユーザー・アカウントは、その実行可能ファイル（たとえば、SQL*Plus の場合は SQLPLUS.EXE）に関する読込み権限を持つようにします。

注意： Oracle8*i* データベースは、Windows NT の LocalSystem 組込みセキュリティ・アカウントを使用します。したがって、Oracle8*i* データベースを実行しているローカル・コンピュータのシステム・アカウントにファイル権限を付与する必要があります。

Windows NT レジストリのセキュリティ

Windows NT の HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE で、Oracle8*i* の DBA やシステム管理者でないユーザーから書込み権限を削除することをお薦めします。

書込み権限を削除するには、次の手順に従います。

1. レジストリを開きます。
2. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE に移動します。
3. 「セキュリティ」メイン・ウィンドウから「アクセス権」を選択します。

   「レジストリ キーのアクセス権」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. Oracle8*i* の DBA やシステム管理者以外のユーザーから書込み権限を削除します。システム・アカウントは、Oracle8*i* データベースを実行するアカウントであるため、フル コントロールを持つ必要があります。
5. Oracle アプリケーションを実行する必要のあるユーザー・アカウントに読込み権限があることを確認します。
6. 「OK」を選択します。
7. レジストリを終了します。

個々のコンポーネントのインストール後の構成作業

コンポーネントによっては、個別にインストール後の構成作業が必要です。次の表で構成要件を確認し、固有の構成手順は、該当する箇所またはドキュメントを参照してください。

コンポーネント	説明	参照
Net8 ネットワーク・ソフトウェア	Net8 Configuration Assistant は、Oracle ネットワークの構成を補助するツールです。 Net8 Client をインストールした場合、インストールの最後に Net8 Configuration Assistant が自動的に起動し、ネットワークの構成をガイドします。 インストール後に、Net8 Configuration Assistant および Net8 Assistant などのツールを使用しても Oracle ネットワークを構成できます。	■ 『Oracle8*i* Net8 管理者ガイド』および両方のツールで使用可能なオンライン・ヘルプ。 ■ 使用可能な構成の選択に関する説明は、4-3 ページの「Net8 構成方法の選択」を参照してください。
Oracle Advanced Security	認証、暗号化、整合性のサポートおよびエンタープライズ・ユーザー・セキュリティを構成する必要があります。	『Oracle8*i* Advanced Security 管理者ガイド』

コンポーネント	説明	参照
Oracle Enterprise Manager コンソール	Oracle Enterprise Manager コンソールをインストールした後で、追加の設定作業（たとえば、サービスの検出、管理者アカウントの作成、デフォルト資格証明の指定など）を実行して、Oracle Enterprise Manager でサービスを管理および監視する必要があります。	『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	特別な Windows NT サービスは手動で作成および構成する必要があります。さらに、Microsoft Transaction Server がインストールされていない場合は、これをインストールする必要があります。	■ 『Oracle8 と Microsoft Transaction Server の連携』 ■ Microsoft のドキュメント
Oracle Workflow Builder および Mailer	次のような、いくつかの構成手順を実行します。 ■ INIT.ORA パラメータ・ファイルの編集 ■ Web サーバーのインストールおよび構成 ■ ベース URL の確認 ■ Oracle Workflow Monitor および HTML ヘルプの設定	■ 『Oracle8*i* Workflow インストレーション補足』 ■ 『Oracle Workflow ガイド』
Pro*COBOL	Pro*COBOL は特定のコンパイラをサポートします。	『Pro*COBOL for Windows プリコンパイラ・スタート・ガイド』の第 1 章「Pro*COBOL の概要」
SQL*Plus ヘルプ・ファイル	SQL*Plus でオンライン・ヘルプを使用する場合は、SQL*Plus の表にヘルプ・ファイルを移入する必要があります。	『SQL*Plus for Windows スタート・ガイド』の第 2 章「SQL*Plus のヘルプとデモ表のインストール」

7

Oracle のコンポーネントとサービスの削除

この章では、Oracle のコンポーネントとサービスの削除方法を説明します。

次の項目について説明します。

- Oracle Universal Installer を使用した Oracle コンポーネントの削除
- 手動でのすべての Oracle コンポーネントとサービスのコンピュータからの削除

Oracle Universal Installer を使用した Oracle コンポーネントの削除

ここでは、Oracle コンポーネントを手動で削除するかわりに、Oracle Universal Installer を使用して削除（Oracle Universal Installer インベントリから削除）する方法を説明します。手動で（たとえば、Windows NT エクスプローラでディレクトリ構造を削除することで）Oracle ホームを削除すると、Oracle ホームのコンポーネントは Oracle Universal Installer インベントリに登録されたままになります。その後、同じ Oracle ホームにインストールを試みると、選択したコンポーネントの一部またはすべてが、すでにインストールされていると Oracle Universal Installer によって判断されるために、インストールできない場合があります。

注意： 手動によるコンポーネントの削除は、インストールの途中で Oracle Universal Installer を終了した場合にのみ許されます。次に、例を示します。

- 「取消」を選択した場合
- コンピュータの電源をオフにした場合
- インストールが完了していない場合（つまり、必要な構成ツールが最後まで実行されていない場合）

この場合、Oracle Universal Installer はインストールをインベントリに登録しません。しかし、ファイルは Oracle ホームにコピーされている可能性があります。ファイルを手動で削除して、インストールを再開します。

作業 1: Net8 サービスとレジストリ・エントリを削除する

Windows NT 上で Net8 Client のコンポーネントを削除する場合、次の手順に従って、まずその Windows NT サービスに対するレジストリ・エントリを削除する必要があります。これらのコンポーネントを削除しない場合は、7-3 ページの「作業 2: Oracle Universal Installer でコンポーネントを削除する」に進み、削除を完了します。

Net8 サービスとレジストリ・エントリを削除するには、次の手順に従います。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「サービス」を選択します。
2. 「開始」の状態の Oracle サービス（Oracle で始まる名前）があればそのサービスを選択し、「停止」を選択します。
3. 「閉じる」を選択して、「サービス」ウィンドウを閉じます。
4. 「コントロール パネル」を終了します。
5. MS-DOS コマンド・プロンプトでレジストリを起動します。

```
C:¥> REGEDT32
```

6. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services に移動し、Oracle*HOME_NAME*TNSListener レジストリ・エントリを削除します。その他すべての Net8 サービスは、Oracle Universal Installer を介して自動的に削除されます。
7. レジストリを終了します。

作業 2: Oracle Universal Installer でコンポーネントを削除する

Oracle Universal Installer でコンポーネントを削除するには、次の手順に従います。

1. Net8 リスナーを削除する場合は、最初に必ず 7-2 ページの「作業 1: Net8 サービスとレジストリ・エントリを削除する」の指示に従ってください。
2. 「スタート」→「プログラム」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。

   Oracle Universal Installer の「ようこそ」ウィンドウが表示されます。
3. 「製品の削除」を選択します。

   「インベントリ」ウィンドウが表示されます。
4. 削除するコンポーネントが見つかるまで、インストール済のコンポーネントのツリーを展開します。
5. 削除するコンポーネントのボックスをチェックします。
6. 「削除」を選択します。

   「確認」ウィンドウが表示されます。
7. 「はい」を選択して、選択したコンポーネントを削除します。

   注意： コンポーネントによっては、削除すると他のコンポーネントが正しく機能しなくなる可能性があることを示すメッセージが表示されます。

   コンポーネントがコンピュータから削除されます。「インベントリ」ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、削除されたコンポーネントは表示されていません。
8. 「閉じる」を選択して、「インベントリ」ウィンドウを閉じます。
9. 「終了」を選択して、Oracle Universal Installer を終了します。

手動でのすべての Oracle コンポーネントとサービスのコンピュータからの削除

まれに、Oracle コンポーネントを完全にコンピュータから削除することで、深刻なシステム上の問題を修正する必要がある場合があります。

コンピュータからの Oracle コンポーネントの全削除は最後の手段として、またシステムから Oracle コンポーネントをすべて削除する場合にのみ行ってください。

Windows NT でのコンポーネントの削除

Windows NT 上でコンピュータから Oracle コンポーネントをすべて削除するには、次の手順に従います。

注意： この手順では、コンピュータからすべての Oracle コンポーネント、サービスおよびレジストリ・エントリが削除されます。さらに、*ORACLE_BASE*¥ORADATA¥*DB_NAME* の下のデータベース・ファイルもすべて削除されます。レジストリ・エントリを削除する際は、特に気を付けてください。間違ったエントリを削除すると、システムが損傷する場合があります。

---

1. Administrator 権限でログインしていることを確認します。
2. 実行中の Oracle サービスがあればすべて停止します。
   a. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「サービス」を選択します。
   b. 「開始」の状態の Oracle サービス（Oracle で始まる名前）があればそのサービスを選択し、「停止」を選択します。
   c. 「閉じる」を選択して、「サービス」ウィンドウを閉じます。
3. MS-DOS コマンド・プロンプトでレジストリを起動します。

   ```
   C:¥> REGEDT32
   ```

4. HKEY_CLASSES_ROOT に移動します。
5. Oracle または ORCL で始まるキーを削除します。
6. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE に移動します。
7. ORACLE キーを削除します。
8. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ODBC¥ODBCINST.INI の下の Oracle ODBC Driver キーを削除します。
9. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services に移動し、この下にある ORACLE で始まるキーをすべて削除します。

10. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥EventLog¥Application に移動し、この下にある ORACLE で始まるキーをすべて削除します。
11. HKEY_CURRENT_USER¥SOFTWARE¥ORACLE に移動します。
12. Oracle または ORCL で始まるキーがある場合は削除します。
13. HKEY_CURRENT_USER¥SOFTWARE¥ODBC¥ODBCINST.INI に移動します。
14. Oracle キーがある場合は削除します。
15. レジストリを閉じます。
16. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「システム」→「環境」タブを選択します。
17. システム環境変数パスを選択し、Path 変数を変更します。
18. すべての Oracle エントリをパスから削除します。たとえば、Oracle によって JRE がインストールされている場合は、%ORACLE_HOME%¥BIN パスと JRE パスを削除します。次のようなパスがある可能性があります。

    ```
    C:¥ORACLE¥ORA81¥BIN;G:¥PROGRAM FILES¥ORACLE¥JRE¥1.1.7¥BIN
    ```

19. 「コントロール パネル」を終了します。
20. *SYSTEM_DRIVE*:¥WINNT¥PROFILES¥ALL USERS¥START MENU¥PROGRAMS に移動します。
21. 次のアイコンを削除します。
    - Oracle - *HOME_NAME*
    - Oracle Installation Products

      HOME_NAME は、以前の Oracle ホーム名です。
22. Windows NT エクスプローラで *SYSTEM_DRIVE*:¥Program Files¥Oracle を削除します。
23. ハード・ディスク・ドライブ上のすべての *ORACLE_BASE* ディレクトリを削除します。
24. コンピュータを再起動します。

Windows 95 または Windows 98 でのコンポーネントの削除

Windows 95 または 98 上でコンピュータから Oracle コンポーネントをすべて削除するには、次の手順に従います。

1. MS-DOS コマンド・プロンプトでレジストリを起動します。

   ```
   C:¥> REGEDIT
   ```

2. HKEY_CLASSES_ROOT に移動します。
3. Oracle または ORCL で始まるキーを削除します。
4. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE に移動します。
5. ORACLE キーを削除します。
6. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ODBC¥ODBCINST.INI の下の Oracle ODBC Driver キーを削除します。
7. HKEY_CURRENT_USER¥SOFTWARE¥ORACLE に移動します。
8. Oracle または ORCL で始まるキーがある場合は削除します。
9. HKEY_CURRENT_USER¥SOFTWARE¥ODBC¥ODBCINST.INI に移動します。
10. Oracle キーを削除します。
11. AUTOEXEC.BAT ファイルを編集して、パス設定から %ORACLE_HOME%¥BIN および JRE のパスを削除します。
12. Windows エクスプローラで *SYSTEM_DRIVE*:¥Program Files¥Oracle を削除します。
13. 次の場所からアイコンを削除します。
    - *SYSTEM_DRIVE*:¥WINDOWS¥START MENU¥PROGRAMS¥ ORACLE - *HOME_NAME*
    - *SYSTEM_DRIVE*:¥WINDOWS¥START MENU¥PROGRAMS¥ ORACLE INSTALLATION PRODUCTS

      HOME_NAME は、以前の Oracle ホーム名です。
14. ハード・ディスク・ドライブ上のすべての *ORACLE_BASE* ディレクトリを削除します。
15. コンピュータを再起動します。

A

インストール可能な個々のコンポーネント

この付録では、各インストール・タイプで使用可能な個々のコンポーネントをリストします。

次の項目について説明します。

- Oracle8i Client のコンポーネント
- 8.1.7 では使用できないコンポーネント

注意：「カスタム」インストール・タイプでは、現在のカテゴリに含まれるすべてのコンポーネントをインストールできるので、この 3 種類の最上位コンポーネントでは、「カスタム」インストール・タイプについては表示しません。いくつかのコンポーネントは、「カスタム」インストールでのみインストールできます。そのようなコンポーネントの場合は、この付録の表の他のインストール・タイプに「×」と表示されます。

注意： ここでは、各インストール・タイプで使用可能な上位コンポーネントを識別します。インストールされたすべてのコンポーネントおよび機能（Required Support Files や Common Files などの下位コンポーネントを含む）のリストへのアクセス方法は、5-8 ページの「インストール・セッションのログの確認」を参照してください。

Oracle8*i* Client のコンポーネント

この表では、Oracle8*i* Client の各インストール・タイプで使用可能なコンポーネントがアルファベット順にリストされます。

コンポーネント	Oracle8*i* Client		
	管理者	プログラマ	アプリケーション・ユーザー
アドバンスト・キューイング API	◎	◎	◎
Net8 Client。次のコンポーネントを含む。	◎	◎	◎
■ Net8 Assistant	◎	◎	◎
■ Net8 Configuration Assistant	◎	◎	◎
■ Oracle Protocol Support	◎	◎	◎
注意：「標準」または「最小」インストール・タイプで Net8 Client をインストールすると、検出されたネットワーキング・プロトコルに対する Oracle Protocol Support が自動的にインストールされます。「カスタム」インストール・タイプで Oracle Protocol Support を選択すると、サポートするネットワーキング・プロトコル（SPX および LU6.2）を選択するよう求めるプロンプトが表示されます。Named Pipes および TCP/IP プロトコル・サポートは、自動的にインストールされ、削除できません。			
Object Type Translator。次のコンポーネントを含む。	◎	◎	×
■ Oracle INTYPE File Assistant	◎	◎	×
Oracle Advanced Security。次のコンポーネントを含む。	◎	◎	◎
1. 暗号化と整合性のサポート。次のコンポーネントを含む。	◎	◎	◎
■ DES40 Encryption	◎	◎	◎
■ DES56 Encryption	◎	◎	◎
■ 3DES_112 Encryption（2 キー・オプション）	◎	◎	◎
■ 3DES_168 Integrity（3 キー・オプション）	◎	◎	◎
■ RC4_40 Encryption	◎	◎	◎
■ RC4_56 Encryption	◎	◎	◎
■ RC4_128 Encryption	◎	◎	◎
■ RC4_256 Integrity	◎	◎	◎

コンポーネント	Oracle8*i* Client 管理者	プログラマ	アプリケーション・ユーザー
■ SHA-1 Integrity	◎	◎	◎
■ MD5 Integrity	◎	◎	◎
2. Thin JDBC Java ベースの暗号化サポート。次のコンポーネントを含む。	◎	◎	◎
■ DES40 Encryption	◎	◎	◎
■ DES56 Encryption	◎	◎	◎
■ RC4_40 Encryption	◎	◎	◎
■ RC4_56 Encryption	◎	◎	◎
■ RC4_128 Encryption	◎	◎	◎
■ RC4_256 Integrity	◎	◎	◎
■ SHA-1 Integrity	◎	◎	◎
■ MD5 Integrity	◎	◎	◎
3. 認証サポート。次のコンポーネントを含む。	◎	◎	◎
■ CyberSafe（SSO サポートあり）	×	×	×
■ DCE（SSO サポートあり）	×	×	×
■ Entrust	×	×	×
■ Identix（バイオメトリック用）	◎	◎	◎
■ Kerberos（SSO サポートあり）	◎	◎	◎
■ RADIUS（スマート・カード、トークン・カードおよびバイオメトリック用）	◎	◎	◎
■ SecurID（トークン・カード用）	◎	◎	◎
■ Secure Socket Layer（X.509 バージョン 3 および SSO サポート）	◎	◎	◎
注意： Kerberos、SecurID および Radius は、「カスタム」インストールの「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウでインストールされます。Identix、CyberSafe および Entrust は、適切なサードパーティ・ソフトウェアがインストールされている場合にのみこのウィンドウにインストール対象として表示されます。DCE は、「カスタム」インストールの「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウでのみインストールできます。			

コンポーネント	Oracle8*i* Client 管理者	プログラマ	アプリケーション・ユーザー
4. エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ。次のコンポーネントを含む。			
■ Oracle Enterprise Login Assistant	◎	◎	◎
■ Oracle Enterprise Security Manager（Oracle Enterprise Manager Integrated Applications で起動）	◎	×	×
■ Oracle Wallet Manager	◎	◎	◎
注意： Oracle Enterprise Login Assistant、Oracle Enterprise Security Manager および Oracle Wallet Manager は、Oracle Advanced Security の機能であり、Oracle Advanced Security ライセンスを購入した場合にのみ使用できます。			
Oracle Call Interface	◎	◎	◎
Oracle Enterprise JavaBeans and CORBA Tools	◎	◎	×
Oracle Enterprise Manager。次のコンポーネントを含む。	◎	×	×
1. Oracle Enterprise Manager Client。次のコンポーネントを含む。	◎	×	×
■ Oracle Enterprise Manager コンソール	◎	×	×
■ Oracle Enterprise Manager Events	◎	×	×
■ Oracle Enterprise Manager Migration Assistant	◎	×	×
■ Oracle DBA Management Pack。次のコンポーネントを含む。	◎	×	×
Oracle DBA Studio[1]	◎	×	×
Oracle Instance Manager	×	×	×
Oracle Schema Manager	×	×	×
Oracle Security Manager	×	×	×
Oracle Storage Manager	×	×	×
SQL*Plus Worksheet	◎	×	×
■ Oracle Enterprise Manager Integrated Applications。次のコンポーネントを含む。	◎	×	×
Oracle Enterprise Security Manager	◎	×	×
注意： Oracle Advanced Security を介してライセンスを得ます。			

コンポーネント	Oracle8*i* Client 管理者	プログラマ	アプリケーション・ユーザー
Oracle Parallel Server Manager	◎	×	×
Oracle *inter*Media Text Manager	◎	×	×
Oracle Forms Server Manager	◎	×	×
Oracle Spatial Index Advisor	◎	×	×
Oracle Directory Manager	◎	×	×
2. Oracle Enterprise Manager Paging Server	×	×	×
3. Oracle Enterprise Manager Quick Tours	◎	×	×
Oracle *inter*Media Client Option	◎	◎	◎
Oracle Internet Directory Client	◎	×	×
Oracle JDBC Drivers。次のコンポーネントを含む。	◎	◎	◎
■ Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.1	◎	◎	◎
■ Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.2	◎	◎	◎
■ Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.1	◎	◎	◎
■ Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.2	◎	◎	×
Oracle Migration Workbench	×	×	×
Oracle Objects for OLE	◎	◎	◎
Oracle ODBC Driver	◎	◎	◎
Oracle Provider for OLE DB	◎	◎	◎
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	×	×	×
Oracle SQLJ。次のコンポーネントを含む。	◎	◎	×
■ SQLJ Runtime	◎	◎	×
■ SQLJ Translator	◎	◎	×
Oracle Universal Installer。次のコンポーネントを含む。	◎	◎	◎
■ Java Runtime Environment（Oracle 用バージョン）	◎	◎	◎
■ Oracle Home Selector	◎	◎	◎

コンポーネント	Oracle8*i* Client		
	管理者	プログラマ	アプリケーション・ユーザー
Oracle Utilities。次のコンポーネントを含む。	◎	◎	◎
■ Export	◎	◎	◎
■ Import	◎	◎	◎
■ Recovery Manager	◎	◎	×
■ SQL*Loader	◎	◎	◎
Oracle Visual Information Retrieval Client	◎	◎	◎
Oracle Workflow Builder	×	×	×
Oracle Workflow Mailer	×	×	×
Oracle XML Developer's Kit	◎	◎	◎
Oracle XML SQL Utility	◎	◎	◎
Oracle8*i* Windows Documentation（インストレーション・ガイドおよびリリース・ノート）	◎	◎	◎
PL/SQL	◎	◎	×
Pro*C/C++	◎	◎	×
Pro*COBOL 8.1.7	×	×	×
Pro*COBOL 1.8.52	◎	◎	×
Replication API	◎	◎	×
SQL*Plus	◎	◎	◎

[1] Oracle Replication Manager の機能を含みます。

参照： B-2 ページの「コンポーネントの説明」には、これらのコンポーネントの説明とリリース番号があります。

8.1.7 では使用できないコンポーネント

8.1.6 に含まれていた次のコンポーネントは、8.1.7 ではインストールできません。

- Oracle Web Publishing Assistant
- Oracle AppWizard for Microsoft Visual C++

B

個々のコンポーネントの説明

ここでは、各インストール・タイプで使用可能な個々のコンポーネントとそのリリース番号を説明します。

次の項目について説明します。

- コンポーネントの説明

注意： コンポーネントの説明は、Oracle Universal Installer で「カスタム」インストール・タイプを選択したときに表示される「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウでも提供されます。カーソルを特定のコンポーネントにドラッグすると、説明が表示されます。

コンポーネントの説明

この表では、インストール可能な個々のコンポーネントの説明とリリース番号を示します。該当するコンポーネントを詳細に説明しているドキュメントへの参照も示します。これから説明するコンポーネントの中には、他のコンポーネントとともに自動的にインストールされるものもあります。

コンポーネント	リリース	説明	参照
アドバンスト・キューイング API	8.1.7	アドバンスト・キューイングのアプリケーション・プログラミング・インタフェース（API）をサポートする機能を提供するコンポーネントです。	『Oracle8*i* アプリケーション開発者ガイド アドバンスト・キューイング』
Assistant Common Files （Net8 Assistant のような、Oracle Aassistant とともにインストールされる）	8.1.7	Oracle Assistant が必要とする、自動的にインストールされる一連のファイルです。次のファイルがあります。 ■ BaliShare 1.0.8（圧縮） ■ DBUI 1.1.2 ■ EWT 3.3.6（圧縮） ■ ICE Browser 4.06.6（圧縮） ■ Java Swing Components 1.1.1（圧縮） ■ Kodiak 1.1.3 ■ Oracle Help for Java 3.1.8（圧縮） ■ SMUI 1.0.8	なし
Java Runtime Environment （Oracle 用バージョン）	1.1.7.30	Oracle Universal Installer のような Java アプリケーションを実行するために必要です。	なし
LSM Administrator GUI	8.1.7	Legato Storage Manager（LSM）サーバーを、別の Windows NT コンピュータから管理するためのクライアント・ツールです。	■ 『Legato Storage Manager for Windows NT 管理者ガイド』 ■ 付録 D「Legato 製コンポーネントのインストールと削除」

コンポーネント	リリース	説明	参照
Legato Storage Manager（LSM）サーバー	8.1.7	Oracle データベースのバックアップに Recovery Manager（RMAN）を使用している場合、テープへのバックアップおよびリストアには LSM Server のようなメディア管理コンポーネントが必要になります。CD-ROM に含まれるメディア管理コンポーネント（LSM Server）をインストールするか、Oracle の Backup Solutions Program（BSP）に準拠するサードパーティ製のメディア管理コンポーネントを使用できます。LSM Server には、Legato NetWorker の縮小版も含まれます。	■ 『Legato Storage Manager for Windows NT 管理者ガイド』 ■ 付録 D「Legato 製コンポーネントのインストールと削除」
Net8 Assistant （Net8 Client とともにインストールされる）	8.1.7	Net8 を構成および管理するための統合化環境を実現するために、構成能力とコンポーネント制御を組み合せたツールです。このツールは、クライアントでもサーバーでも使用可能です。 Net8 Assistant を使用して、次のネットワーク・コンポーネントを構成します。 ■ ネーミング 単純な名前と接続識別子を定義して、ネットワーク位置およびサービスの ID を識別するために定義した接続記述子とマップします。Net8 Assistant は、ローカルの TNSNAMES.ORA ファイル、集中化された LDAP 準拠のディレクトリ・サーバー、または Oracle Names Server の接続記述子の構成をサポートします。 ■ ネーミング・メソッド 接続識別子を解決して接続記述子を得るための様々な方法を構成します。 ■ リスナー クライアント接続を受け入れるために、リスナーを作成し構成します。 Oracle Names Server が構成されると、Net8 Assistant によって起動、停止、チューニングまたは統計情報の収集ができます。	『Oracle8*i* Net8 管理者ガイド』

コンポーネント	リリース	説明	参照
Net8 Client	8.1.7	クライアントがネットワークを介してデータベースに接続できるようにするコンポーネントです。クライアント側のアプリケーションから Net8 に要求が送信されると、その要求はネットワークを介してサーバーに転送されます。 （Oracle Universal Installer ではなく）Net8 Client によって、TCP/IP と Oracle Named Pipes がインストールされ、SPX が自動検出されます。SPX は、コンピュータ上で適切なソフトウェアが検出された場合にのみインストールされます。「カスタム」インストール・タイプで、このコンポーネントを明示的に選択した場合、コンピュータに適切なソフトウェアがなくてもインストールされます。	『Oracle8*i* Net8 管理者ガイド』
Net8 Configuration Assistant （Net8 Client とともにインストールされる）	8.1.7	ネットワーク・コンポーネントを構成できるようにするツールです。このマニュアルで説明しているとおり、Net8 Configuration Assistant はインストール後に自動的に実行されます。Net8 Configuration Assistant は、クライアントまたはサーバーで使用します。ネーミング・メソッドの使用方法、リスナー、TNSNAMES.ORA ファイル内のネット・サービス名、およびディレクトリ・サーバー・アクセスを構成するために、スタンドアロン・モードでも実行できます。	『Oracle8*i* Net8 管理者ガイド』
Object Type Translator（OTT）	8.1.7	OTT は、すでに作成されて Oracle データベースに格納されている抽象データ型を表現する C 構造体を作成するために使用されます。オブジェクトを利用するには、データベースに対して OTT を実行します。これにより、C 構造体を含むヘッダー・ファイルが生成されます。	『Oracle8*i* コール・インタフェース・プログラマーズ・ガイド』

コンポーネント	リリース	説明	参照
Oracle Advanced Security	8.1.7	Oracle Advanced Security は、Oracle8*i* に次のセキュリティ・サービスの包括セットを提供します。	『Oracle8*i* Advanced Security 管理者ガイド』
1. 認証サポート		厳密認証サポートが提供されます。詳細は、付録 A「インストール可能な個々のコンポーネント」を参照してください。	
2. 認可サポート		認可ソリューションは、分散コンピューティング環境（DCE）、および Oracle Advanced Security のエンタープライズ・ロール管理機能で提供されます。	
3. 暗号化と整合性のサポート		データの機密性は、付録 A「インストール可能な個々のコンポーネント」にリストされている暗号化とデータ整合性のタイプを使用して確保されます。 **注意：** 米国輸出管理規定（EAR）が最近変更され、オラクル社は、Oracle Advanced Security の全世界版を出荷できるようになりました。Oracle Advanced Security は、以前は米国およびカナダの市場でのみ入手可能だった強力なプロトコル暗号化を Oracle8*i* データベースに組み込みます。	
4. エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ・サポート		エンタープライズ・ユーザーの集中管理、エンタープライズ・ロール管理およびシングル・サインオンのために、Oracle Internet Directory などの LDAP（Lightweight Directory Access Protocol）v3 準拠のディレクトリ・サービスとの統合が提供されています。	
5. シングル・サインオン・サポート		シングル・サインオン（1 回のユーザー認証）が提供されます。その後の接続では、厳密認証が透過的に行われます。Kerberos、CyberSafe、DCE および SSL（Secure Socket Layer）ベースのシングル・サインオンがサポートされます。	
Oracle Call Interface（OCI）	8.1.7	C または C++ プログラムから Oracle データベースにアクセスするための API です。C または C++ プログラムから直接 OCI 関数をコールし、SQL 文を実行させます。	■ 『Oracle8*i* コール・インタフェース・プログラマーズ・ガイド』 ■ 『Oracle コール・インタフェース for Windows スタート・ガイド』

コンポーネント	リリース	説明	参照
Oracle DBA Management Pack	2.2	Oracle Enterprise Manager にバンドルされている、一連のツールとウィザードです。Oracle DBA Management Pack は、データベース管理作業の大半を実行し、Oracle データベースのすべてのバージョンをサポートします。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle DBA Studio （Oracle DBA Management Pack の一部）	2.2	スキーマ、セキュリティ、記憶域、インスタンスおよびレプリケーション管理の機能性を 1 つの管理ツールに統合したものです。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Directory Manager （Oracle Enterprise Manager Integrated Applications の一部）	2.1.1	Java ベースのツールで、Oracle Internet Directory の機能の大半とその関連プロセスを管理します。	『Oracle8*i* Internet Directory 管理者ガイド』
Oracle Enterprise JavaBeans and CORBA Tools	8.1.7	トランザクション・アプリケーションを Java の分散コンポーネントとして開発するためのアーキテクチャです。	『Oracle8*i* Enterprise JavaBeans Developer's Guide and Reference』
Oracle Enterprise Login Assistant	1.1	シングル・サインオンを使用可能にするツールです。シングル・サインオン機能は Oracle Wallet Manager 機能のサブセットを実装し、ユーザーの Wallet を開きアプリケーションがそれを使用できるようにします。	『Oracle8*i* Advanced Security 管理者ガイド』
Oracle Enterprise Manager	2.2	異機種間環境を集中管理するための統合化ソリューションを実現する一連のコンポーネントです。Oracle Enterprise Manager は、グラフィカル・コンソール、Oracle Management Server、Oracle Intelligent Agent、共通サービス、および Oracle とサードパーティのコンポーネントを管理する統合化された包括的なシステム管理プラットフォームを実現するためのツールの組合せです。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Enterprise Manager Client	2.2	Oracle Enterprise Manager のファースト・ティアは、コンソールや管理アプリケーションのようなクライアントから導出され、それらのクライアントは管理者に対してすべての管理作業を GUI（グラフィカル・ユーザー・インタフェース）で表します。このようなクライアント・コンポーネントは、ローカルに、または Web ブラウザとともにインストールできます。	『Oracle Enterprise Manager 概説』

コンポーネント	リリース	説明	参照
Oracle Enterprise Manager コンソール	2.2	Oracle Enterprise Manager のファースト・ティアのクライアント・インタフェースで、次の機能があります。 ■ 複数のデータベースを集中管理、診断およびチューニングします。 ■ その他の Oracle コンポーネントおよびサービスを管理します。 ■ Oracle コンポーネントおよびサードパーティ・サービスの状態を、24 時間監視して対応します。 ■ 複数のノード上のジョブを多様な時間間隔でスケジュールします。 ■ イベントのネットワーク化されたサービスを監視します。 ■ データベースとその他のサービスを論理的な管理グループに編成することで、表示をカスタマイズします。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Enterprise Manager Events	2.2	グローバル環境で問題の発生を監視するために使用する事前定義のイベント・テストのセットです。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Enterprise Manager Integrated Applications	2.2	Oracle 環境を管理するための Oracle Enterprise Manager に統合されるアプリケーションと、環境が必要とする場合に Oracle Enterprise Manager とともにインストールされるアプリケーションです。そのすべてのアプリケーションには、Oracle Enterprise Manager のナビゲータ・ペインおよびコンソール・アプリケーション・ドローワのどちらかまたは両方から、またはオペレーティング・システムからアクセスできます。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Enterprise Manager Migration Assistant	2.2	Oracle Enterprise Manager リリース 1.6 およびそれ以上のリポジトリをリリース 2.2 のリポジトリに移行するツールです。 **注意：** Oracle Enterprise Manager Migration Assistant は、Windows NT、Windows 95、Windows 2000 および Windows 98 でのみサポートされます。ただし Oracle Enterprise Manager Migration Assistant は、ソースおよび宛先のリポジトリ・データベースのプラットフォームにかかわらず、リポジトリ・データをリリース 1.*x* リポジトリからリリース 2.2 にリモートで移行できます。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』

コンポーネント	リリース	説明	参照
Oracle Enterprise Manager Paging Server	2.2	管理者がコンソールからのページング通知を受け入れられるようにする機能です。	『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』
Oracle Enterprise Manager Quick Tours	2.2	HTML ベースの学習ツールで、様々な Oracle Enterprise Manager コンポーネントを実際にインストールすることなく、それらに関する知識を速やかにかつ簡単に得ることができます。次のコンポーネントに対応しています。 ■ Oracle Enterprise Manager ■ Oracle DBA Management Pack ■ Change Management Pack ■ Diagnostics Pack ■ Tuning Pack ■ Management Pack for Oracle Applications ■ Management Pack for SAP R/3 ■ Standard Management Pack	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Enterprise Security Manager （Oracle Enterprise Manager Integrated Applications の一部）	2.0	LDAP 準拠のディレクトリ・サーバーを使用して Oracle 環境のユーザー・セキュリティの管理を支援するツールです。このツールによって、同時に複数のデータベースが運用される中で、管理者は企業レベルのロール認可を管理できるようになります。	『Oracle8*i* Advanced Security 管理者ガイド』
Oracle Forms Server Manager （Oracle Enterprise Manager Integrated Applications の一部）	2.1	Forms Listener、Forms Server、Load Balancer Server および Load Balancer Client の制御と監視を可能にするツールです。さらに、起動やシャットダウンのような基本的制御の他に、このツールによって、サービス停止、メモリー使用量超過、CPU 使用量超過などのイベントを監視することや、問題が起きたときに自動的に修復することができます。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Home Selector （Oracle Universal Installer とともにインストールされる）	1.7.0	適切な Oracle ホーム・ディレクトリをプライマリ・ホームにするために、環境パスを編集できるようにするツールです。	『Oracle8*i* Client for Windows 管理者ガイド』の第 3 章「複数の Oracle ホームおよび Optimal Flexible Architecture」
Oracle Instance Manager （Oracle DBA Management Pack の一部）	2.2	Oracle 環境内のデータベース・インスタンスおよびセッションを管理するツールです。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』

コンポーネント	リリース	説明	参照
Oracle Internet Directory Client	2.1.1	Oracle8*i* データベースの様々なコンポーネントが、記憶域の集中化のために Oracle Internet Directory を使用できるようにするコンポーネントです。	『Oracle8*i* Internet Directory 管理者ガイド』
Oracle Internet File System（Oracle *i*FS）	1.1	Oracle *i*FS は、Oracle8*i* データベースをファイル・システムのように動作させ、Windows、Web、FTP および電子メール・クライアントを介してアクセスできるようにします。Oracle *i*FS は、多くのコンテンツ管理アプリケーションの優れた開発プラットフォームでもあります。Java および XML を使用して、ファイル・システムのすべての機能を利用して、ニーズに合った外観と動作にカスタマイズできます。	『Oracle Internet File System Setup and Administration Guide』 Oracle *i*FS が収録されている CD-ROM の詳細は、『Oracle8*i* for Windows リリース・ノート』を参照してください。
Oracle INTYPE File Assistant （Object Type Translator とともにインストールされる）	8.1.7	Object Type Translator により変換されるタイプのリストを提供する INTYPE ファイルの作成を補助します。このコンポーネントは、Object Type Translator とともに自動的にインストールされます。	『Oracle コール・インタフェース for Windows スタート・ガイド』
Oracle JDBC（Java Database Connectivity）Drivers	8.1.7	JavaSoft によって指定された Java クラスの標準セットで、Java からリレーショナル・データに対するベンダーに依存しないアクセスを実現します。個々のリリース番号は、付録 A「インストール可能な個々のコンポーネント」のコンポーネント・リストを参照してください。	『Oracle8*i* JDBC 開発者ガイドおよびリファレンス』
Oracle Migration Workbench	1.3	非 Oracle データベースから Oracle8*i* へのデータとアプリケーションの移行プロセスを単純化するツールです。Oracle Migration Workbench によって、アプリケーション・システム全体（すなわち、トリガーおよびストアド・プロシージャを含むデータベース・スキーマ）を、統合化されたビジュアル環境に迅速かつ簡単に移行できます。次の非 Oracle データベースからの移行がサポートされます。 ■ Microsoft Access ■ Microsoft SQL Server ■ Sybase Adaptive Server	■ 『Oracle Migration Workbench Reference for MS Access Reference Guide』 ■ 『Oracle Migration Workbench Reference for MS SQL Server and Sybase Adaptive Server Reference Guide』
Oracle Objects for OLE（OO4O）	8.1.7	OLE インプロセス・サーバーを伴うカスタム・コントロール（OCX または ActiveX）で、それによって Oracle8*i* データベース固有の機能を Windows アプリケーションにプラグインできます。	「スタート」メニューから使用可能なオンライン・ヘルプ

コンポーネント	リリース	説明	参照
Oracle ODBC（Open Database Connectivity）Driver	8.1.7	Windows NT、Windows 2000、Windows 95 および Windows 98 クライアント・システムから Oracle8*i* データベースへの ODBC 接続をサポートするコンポーネントです。Oracle ODBC Driver は Microsoft ODBC 仕様のバージョン 3.51 に準拠しています。 SQLBulkOperations ODBC 関数はサポートされません。	「スタート」メニューから使用可能なオンライン・ヘルプ
Oracle Parallel Server Manager （Oracle Enterprise Manager Integrated Applications の一部）	2.2	Oracle Parallel Server を使用するデータベースを検出して管理するコンポーネントです。Oracle Enterprise Manager コンソールを拡張して、Oracle Parallel Server Manager はナビゲータの「データベース」フォルダ内の単一インスタンス・データベースの横に、すべての検出されたパラレル・サーバーのリストを表示します。プロパティ・シートを使用すると、Oracle Parallel Server を使用してデータベースを起動およびシャットダウンできるほか、インスタンス、データ・ファイル、インダウト・トランザクション、プロファイル、REDO ログ・グループ、ロール、ロールバック・セグメント、スキーマ・オブジェクト、ユーザーおよび表領域の状態をチェックできます。	■ 『Oracle8*i* Parallel Server for Windows NT 管理者ガイド』 ■ 『Oracle8*i* Parallel Server セットアップおよび構成ガイド』
Oracle Protocol Support - LU6.2	8.1.7	このアダプタは、IBM Advanced Program-to-Program Communication（APPC）アーキテクチャの一部です。APPC は、SNA（Systems Network Architecture）ネットワーク用の IBM のピアツーピア（プログラムツープログラム）プロトコルです。SNA は、ISO（International Standards Organization）の OSI（Open Systems Interconnect）モデルに似ている IBM 参照モデルです。 LU6.2 プロトコルおよび PU2.1（Physical Unit Type 2.1）プロトコルを使用する SNA ネットワークによって、APPC が実現されます。LU6.2 プロトコルは、2 つのアプリケーション・プログラム間のセッションを定義します。LU6.2 はコンポーネントに依存しない LU タイプです。 LU6.2 プロトコル・サポートによって、パーソナル・コンピュータ上の Oracle アプリケーションは Oracle データベースと通信できるようになります。この通信は、APPC をサポートするホスト・システム上の Oracle データベースと SNA ネットワークを介して行われます。	『Oracle8*i* Net8 管理者ガイド』

コンポーネント	リリース	説明	参照
Oracle Protocol Support - Named Pipes	8.1.7	Named Pipes および Net8 を使用して、クライアント / サーバーがネットワークで通信できるようにするプロトコルです。Oracle コンポーネントのこの組合せによって、クライアントの Oracle アプリケーションは、Named Pipes を介してリモートの Oracle データベースと通信できるようになります（Oracle データベースを実行しているホスト・システムが、Named Pipes を使用したネットワーク通信をサポートしている場合）。	『Oracle8*i* Net8 管理者ガイド』
Oracle Protocol Support - SPX	8.1.7	SPX/IPX および Net8 を使用して、クライアント / サーバーがネットワークで通信できるようにするプロトコルです。Oracle コンポーネントのこの組合せによって、クライアントの Oracle アプリケーションは、SPX/IPX を介してリモートの Oracle データベースと通信できるようになります（Oracle データベースを実行しているホスト・システムが、SPX/IPX を使用したネットワーク通信をサポートしている場合）。このプロトコルは、主に Novell Directory Services（NDS）環境で使用されます。	『Oracle8*i* Net8 管理者ガイド』
Oracle Protocol Support - TCP/IP	8.1.7	TCP/IP および Net8 を使用して、クライアント / サーバーがネットワークで通信できるようにするプロトコルです。Oracle コンポーネントのこの組合せによって、クライアントの Oracle アプリケーションは、TCP/IP を介してリモートの Oracle データベースと通信できるようになります（Oracle データベースを実行しているホスト・システムが、TCP/IP を使用したネットワーク通信をサポートしている場合）。	『Oracle8*i* Net8 管理者ガイド』
Oracle Provider for OLE DB	8.1.7	アプリケーション、コンパイラおよびその他のデータベース・コンポーネントによる高いパフォーマンスと Oracle データへの効果的なアクセスを提供するインタフェースです。	『Oracle Provider for OLE DB ユーザーズ・ガイド』
Oracle Schema Manager （Oracle DBA Management Pack の一部）	2.2	クラスタ、索引、スナップショット、表およびビューのようなスキーマ・オブジェクトを作成、変更または削除できるようにするツールです。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』

コンポーネント	リリース	説明	参照
Oracle Security Manager （Oracle DBA Management Pack の一部）	2.2	データベース・ユーザーおよび対応付けられた権限、プロファイルおよびロールを管理するツールです。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	8.1.7	Oracle8 データベース・リリース 8.0.6 およびリリース 8.1.*x* と Microsoft Transaction Server を完全に統合するコンポーネントです。このコンポーネントによって、Microsoft Transaction Server を使用する COM ベースのアプリケーションの開発および配置が可能になります。	『Oracle8 と Microsoft Transaction Server の連携』
Oracle Spatial Index Advisor （Oracle Enterprise Manager Integrated Applications の一部）	2.2	データの空間索引の分析およびチューニングを支援するツールです。その分析機能によって、問合せのパフォーマンスが最適化されるように索引が正しく定義されているかどうかがわかります。また、視覚的な検証によってデータの配布を理解できるようになります。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle SQLJ	8.1.7	埋込み SQL 文を伴う Java プログラムに対するプリプロセッサです。JDBC コールを伴う Java プログラムを生成します。	『Oracle8*i* JDBC 開発者ガイドおよびリファレンス』
Oracle Storage Manager （Oracle DBA Management Pack の一部）	2.2	データベース記憶域を最適化するために、表領域、データ・ファイル、REDO ログおよびロールバック・セグメントを管理できるようにするツールです。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Universal Installer	1.7.1	Oracle コンポーネントのインストール、更新、削除を短時間で実行できる GUI（グラフィカル・ユーザー・インタフェース）アプリケーションです。	「スタート」→「プログラム」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer Concepts Guide」を選択します。
Oracle Utilities	8.1.7	データベース管理に使用される一連のコンポーネントです。Oracle Utilities には、Export Utility、Import Utility、SQL*Loader および Recovery Manager が含まれます。	『Oracle8*i* ユーティリティ・ガイド』
Oracle Visual Information Retrieval Client	8.1.7	このコンポーネントには、Oracle8*i* データベースによって管理されるイメージ・データを保存、取得および操作する機能があります。	『Oracle Visual Information Retrieval User's Guide and Reference』

コンポーネント	リリース	説明	参照
Oracle Wallet Manager	2.1	1 対の公開鍵と秘密鍵を生成して認証局に発行する証明書要求の作成、認証のための証明書のインストール、認証のための信頼できる認証局を構成するツールです。	『Oracle8*i* Advanced Security 管理者ガイド』
Oracle Workflow Builder	2.5.2	Oracle Workflow Builder は、ワークフロー・プロセス定義を作成、表示および変更するためのグラフィカル・ユーザー・インタフェース・ツールです。Oracle Workflow Builder には、ビジネス・プロセスのアクティビティとコンポーネントを定義するナビゲータ・ウィンドウがあります。	『Oracle Workflow ガイド』
Oracle Workflow Mailer	2.5.2	このコンポーネントは、Oracle Workflow 通知システムの電子メール送信および応答処理を実行します。プログラムは、通知電子メール・メッセージをユーザーに送信し、ユーザー応答を解析して通知を完了します。このコンポーネントには、Windows NT 上の任意の MAPI 準拠メール・アプリケーションと直接統合できる実装があります。 MAPI 準拠の実装を Windows NT コンピュータにインストールするには、「カスタム」インストール・タイプを使用して Oracle Workflow Mailer を選択します。この実装では、MAPI 準拠のメール・アプリケーションがコンピュータにインストールされ、メール・サーバーとして機能している必要があります。	『Oracle Workflow ガイド』
Oracle XML Developer's Kit	8.1.7	このキットは、XML データの受渡しと生成を行う API セットから構成されます。これらのインタフェースは、Java、C、C++ および PL/SQL 用に作成されています。このキットは、次のコンポーネントから構成されます。 ■ XML Parser for Java ■ XML Parser for C ■ XML Parser for C++ ■ XML Parser for PL/SQL ■ XML Class Generator for Java ■ XML Class Generator for C++ ■ XML Transviewer Beans ■ XSQL Servlet	■ 『Oracle8*i* アプリケーション開発者ガイド - XML』 ■ 『Oracle8*i* XML リファレンス・ガイド』

コンポーネント	リリース	説明	参照
Oracle XML SQL Utility	2.0	このユーティリティは、問合せが結果セットまたは XML にラップされているオブジェクトを返せるようにする Java クラスおよび PL/SQL ラッパーのセットです。	■ 『Oracle8*i* アプリケーション開発者ガイド - XML』 ■ 『Oracle8*i* XML リファレンス・ガイド』
Oracle8*i* Windows Documentation（インストレーション・ガイドおよびリリース・ノート）	8.1.7	インストレーション・ガイド（このガイド）では、Oracle コンポーネントのインストール方法を説明します。『Oracle8*i* for Windows リリース・ノート』には、重要な最新情報が記載されています。	このインストレーション・ガイド 『Oracle8*i* for Windows リリース・ノート』
PL/SQL	8.1.7	Oracle による SQL のプロシージャ拡張である PL/SQL は、高度な第 4 世代プログラミング言語（4GL）です。PL/SQL には、カプセル化、オーバーロード、コレクション型、例外処理、情報隠蔽などの最新機能が用意されています。PL/SQL では、透過的な SQL アクセス、Oracle サーバーとツールの緊密な統合、移植性およびセキュリティも提供されます。	『PL/SQL ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
Pro*C/C++	8.1.7	Pro*C/C++ プリコンパイラは、C および C++ プログラムに埋め込まれている SQL 文を受け取り、標準 C コードに変換します。このコードをプリコンパイルすると、C または C++ プログラムになります。このプログラムをコンパイルして、Oracle データベースにアクセスするアプリケーションを構築します。	■ 『Oracle8*i* Pro*C/C++ プリコンパイラ・プログラマーズ・ガイド』 ■ 『Pro*C/C++ for Windows プリコンパイラ・スタート・ガイド』
Pro*COBOL	8.1.7 および 1.8.52	Oracle8*i* データベースにアクセスするには、SQL という高級問合せ言語を使用します。通常は、SQL*Plus などの対話形式インタフェースを介して SQL を使用します。Pro*COBOL は、COBOL プログラム内に埋め込まれている SQL 文を標準 Oracle ランタイム・ライブラリ・コールに変換するプリコンパイラです。出力ファイルは、その後、COBOL コンパイラでコンパイルできます。	■ 『Oracle8*i* Pro*COBOL プリコンパイラ・プログラマーズ・ガイド』 ■ 『Pro*COBOL for Windows プリコンパイラ・スタート・ガイド』
Replication API	8.1.7	レプリケーション管理用にカスタマイズされたスクリプトを作成する API を提供するツールです。	『Oracle8*i* レプリケーション・マネージメント API リファレンス』

コンポーネント	リリース	説明	参照
SQL*Plus	8.1.7	Windows 環境で、SQL および PL/SQL データベース言語を使用できるようにするツールです。SQL*Plus には、コマンドライン・バージョンと GUI バージョンがあります。	『Oracle8*i* SQL*Plus ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
SQL*Plus Worksheet （Oracle DBA Management Pack の一部）	2.2	手動で、SQL、PL/SQL およびデータベース管理者のコマンドを入力したり、ストアド・スクリプトを実行したりするための GUI アプリケーションです。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
SQLJ Runtime （Oracle SQLJ とともにインストールされる）	8.1.7	JDBC ドライバ上で実行する Pure Java コードのシン・レイヤーです。Oracle SQLJ によって SQLJ ソース・コードが変換されるときに、Java アプリケーションに埋め込まれた SQL コマンドは SQLJ Runtime コールに置換されます。	『Oracle8*i* SQLJ 開発者ガイドおよびリファレンス』
SQLJ Translator （Oracle SQLJ とともにインストールされる）	8.1.7	埋込み SQL 文が含まれている Java プログラムに対するプリプロセッサです。SQLJ Translator は、SQL 文を JDBC コールに変換します。	『Oracle8*i* SQLJ 開発者ガイドおよびリファレンス』
WINSOCK2 on Windows NT サポート	8.1.7	Net8 は、WINSOCK 1.1 および WINSOCK2 ソケット・インタフェースの両方をサポートします。Net8 は Windows NT 上の WINSOCK2 を自動的に検出し、使用可能な場合は WINSOCK2 を使用します。WINSOCK2 は、Windows NT リリース 4.0 オペレーティング・システムの標準機能です。Oracle は、Net8 で次の WINSOCK2 機能を使用します。 ■ イベントと重複した I/O ■ 共有ソケット（オプション機能として使用可能）	『Oracle8*i* Client for Windows 管理者ガイド』の付録 E「Net8 の構成」

参照： 付録 A「インストール可能な個々のコンポーネント」には、個々のコンポーネントをインストールするときのインストール・タイプの詳細があります。

C

各国語サポート

この付録では、各国語サポート（NLS）について説明します。

次の項目について説明します。

- NLS_LANG パラメータ
- 一般的に使用される NLS_LANG の値
- MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定

NLS_LANG パラメータ

Oracle は各国語サポート（NLS）を提供します。これによってユーザーは、NLS_LANG パラメータに定義されたそれぞれの言語のデータベースを対話的に操作できます。Oracle8*i* コンポーネントをインストールすると、NLS_LANG パラメータは Net8 Client インストール・スクリプトによって登録されます。

インストール時の NLS_LANG パラメータのデフォルト値は、現在選択されている Oracle ホームの既存の NLS_LANG パラメータの値、またはオペレーティング・システムのデフォルト言語に対応する値です。デフォルト言語と NLS_LANG の値のマッピングのリストは、C-3 ページの「一般的に使用される NLS_LANG の値」にあります。

NLS_LANG パラメータは、HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE¥HOME*ID*¥NLS_LANG サブキーのレジストリに格納されています。ただし *ID* は Oracle ホームを識別する一意の番号です。

NLS_LANG パラメータは、次のような形式です。

```
NLS_LANG = LANGUAGE_TERRITORY.CHARACTER_SET
```

文字列の意味は、次のとおりです。

LANGUAGE	言語と、その言語でメッセージ、曜日、月を表示する場合の規則などを指定します。
TERRITORY	地域と、その地域で週数と日数を計算する場合の規則などを指定します。
CHARACTER_SET	メッセージを表示する場合に使用するキャラクタ・セットを制御します。

参照：

- 複数の Oracle ホームに対するサブキーの位置の詳細は、『Oracle8*i* Client for Windows 管理者ガイド』の付録 C を参照してください。
- 『Oracle8*i* NLS ガイド』には、NLS_LANG パラメータおよび NLS 初期化パラメータの詳細があります。

一般的に使用される NLS_LANG の値

次の表は、一般的に使用される様々な言語に対応する NLS_LANG の値を示しています。

言語	NLS_LANG の値
アラビア語	ARABIC_UNITED ARAB EMIRATES.AR8MSWIN1256
ブラジル・ポルトガル語	BRAZILIAN PORTUGUESE_BRAZIL.WE8ISO8859P1
ブルガリア語	BULGARIAN_BULGARIA.CL8MSWIN1251
カナダ・フランス語	CANADIAN FRENCH_CANADA.WE8ISO8859P1
カタロニア語	CATALAN_CATALONIA.WE8ISO8859P1
クロアチア語	CROATIAN_CROATIA.EE8MSWIN1250
チェコ語	CZECH_CZECH REPUBLIC.EE8MSWIN1250
デンマーク語	DANISH_DENMARK.WE8ISO8859P1
オランダ語	DUTCH_THE NETHERLANDS.WE8ISO8859P1
エジプト語	ARABIC_UNITED ARAB EMIRATES.AR8MSWIN1256
英語	AMERICAN_AMERICA.WE8ISO8859P1
英語 （イギリス）	ENGLISH_UNITED KINGDOM.WE8ISO8859P1
エストニア語	ESTONIAN_ESTONIA.BLT8MSWIN1257
フィンランド語	FINNISH_FINLAND.WE8ISO8859P1
フランス語	FRENCH_FRANCE.WE8ISO8859P1
ドイツ語	GERMAN_GERMANY.WE8ISO8859P1
ギリシャ語	GREEK_GREECE.EL8MSWIN1253
ヘブライ語	HEBREW_ISRAEL.IW8MSWIN1255
ハンガリー語	HUNGARIAN_HUNGARY.EE8MSWIN1250
アイスランド語	ICELANDIC_ICELAND.WE8ISO8859P1
インドネシア語	INDONESIAN_INDONESIA.WE8ISO8859P1
イタリア語	ITALIAN_ITALY.WE8ISO8859P1
日本語	JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS
韓国語	KOREAN_KOREA.KO16KSC5601
ラテンアメリカ・ スペイン語	LATIN AMERICAN SPANISH_AMERICA.WE8ISO8859P1

言語	NLS_LANG の値
ラトビア語	LATVIAN_LATVIA.BLT8MSWIN1257
リトアニア語	LITHUANIAN_LITHUANIA.BLT8MSWIN1257
スペイン語（メキシコ）	MEXICAN SPANISH_MEXICO.WE8ISO8859P1
ノルウェー語	NORWEGIAN_NORWAY.WE8ISO8859P1
ポーランド語	POLISH_POLAND.EE8MSWIN1250
ポルトガル語	PORTUGUESE_PORTUGAL.WE8ISO8859P1
ルーマニア語	ROMANIAN_ROMANIA.EE8MSWIN1250
ロシア語	RUSSIAN_CIS.CL8MSWIN1251
中国語（簡体字）	SIMPLIFIED CHINESE_CHINA.ZHS16GBK
スロバキア語	SLOVAK_SLOVAKIA.EE8MSWIN1250
スペイン語	SPANISH_SPAIN.WE8ISO8859P1
スウェーデン語	SWEDISH_SWEDEN.WE8ISO8859P1
タイ語	THAI_THAILAND.TH8TISASCII
中国語（繁体字）	TRADITIONAL CHINESE_TAIWAN.ZHT16MSWIN950
トルコ語	TURKISH_TURKEY.WE8ISO8859P9
ウクライナ語	UKRAINIAN_UKRAINE.CL8MSWIN1251
ベトナム語	VIETNAMESE_VIETNAM.VN8MSWIN1258

MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定

Oracle Internet Directory コマンドライン・ツールや、SQL*Plus、SQL*Loader、Import、Export などの Oracle Utilities を MS-DOS モードで使用するときは、最初にそのセッションの NLS_LANG パラメータのキャラクタ・セット・フィールドを正しい値に設定する必要があります。

注意： Oracle Internet Directory コマンドライン・ツールは、コンピュータの MS-DOS コマンド・プロンプトから実行します。これらのツールを実行するために、Windows NT 用の UNIX エミュレーション・ユーティリティは不要です。エミュレーション・ユーティリティは、Oracle Internet Directory のシェル・スクリプト・ツールを実行する場合にのみ必要です。詳細は、『Oracle8*i* Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

これは、いくつかの例外がありますが、MS-DOS モードでは OEM コード・ページなどの Windows（ANSI コード・ページ）とは異なるキャラクタ・セット（またはコード・ページ）を使用し、レジストリ内のデフォルトの Oracle ホームの NLS_LANG パラメータが常に該当する Windows コード・ページに設定されているためです。MS-DOS モード・セッションの NLS_LANG パラメータが適切に設定されていない場合、キャラクタ・セットの変換が正しく行われないためにエラー・メッセージやデータが破壊される可能性があります。

日本語、韓国語、中国語（簡体字）および中国語（繁体字）では、OEM コード・ページは ANSI コード・ページと同一です。このような場合は、MS-DOS モードで NLS_LANG パラメータを設定する必要はありません。

バッチ・モードでも同様に、バッチ・プロシージャの開始時に SET NLS_LANG コマンドを挿入して、プロシージャで処理するファイルのキャラクタ・セットに応じて、NLS_LANG に適切なキャラクタ・セット値を設定します。

次の表は、サポートされている各言語の MS-DOS モードでの OEM プライマリ・コード・ページに対応する Oracle キャラクタ・セットを示しています。

言語	キャラクタ・セット
アラビア語	AR8ASMO8X
ブラジル・ポルトガル語	WE8PC850
カタロニア語	WE8PC850
チェコ語	EE8PC852
デンマーク語	WE8PC850
オランダ語	WE8PC850
英語	US8PC437
フィンランド語	WE8PC850
フランス語	WE8PC850
ドイツ語	WE8PC850
ギリシャ語	EL8PC737
ハンガリー語	EE8PC852
イタリア語	WE8PC850
日本語	JA16SJIS
韓国語	KO16KSC5601
ラテンアメリカ・スペイン語	WE8PC850
ノルウェー語	WE8PC850

言語	キャラクタ・セット
ポーランド語	EE8PC852
ポルトガル語	WE8PC850
ルーマニア語	EE8PC852
ロシア語	RU8PC866
中国語（簡体字）	ZHS16GBK
スロバキア語	EE8PC852
スロベニア語	EE8PC852
スペイン語	WE8PC850
スウェーデン語	WE8PC850
中国語（繁体字）	ZHT16MSWIN950
トルコ語	TR8PC857

参照： Oracle Internet Directory NLS の問題および Oracle Internet Directory 環境の様々なコンポーネントおよびツールに必要な NLS_LANG 環境変数は、『Oracle8*i* Internet Directory 管理者ガイド』の第 11 章を参照してください。

D

Legato 製コンポーネントのインストールと削除

この付録では、Legato Storage Manager（LSM）コンポーネントのインストールおよび削除方法について説明します。

次の項目について説明します。

- LSM Server
- LSM Administrator GUI

注意： この 2 つの Legato 製コンポーネントを、同じコンピュータに別個にインストールする必要はありません。LSM Server ソフトウェアには LSM Administrator GUI が含まれています。LSM Server をインストールする場合は、その同じコンピュータに LSM Administrator GUI を別途インストールしないでください。LSM Server を別の Windows NT または Windows 2000 コンピュータから管理するには、その Windows NT または Windows 2000 コンピュータに LSM Administrator GUI をインストールします。インストール方法は、D-6 ページの「LSM Administrator GUI のインストール」を参照してください。

LSM Server

LSM Server はメディア管理レイヤー（MML）です。Oracle データベースのバックアップおよびリストアに Recovery Manager（RMAN）を使用している場合、テープ・ストレージへのバックアップおよびリストアには LSM のような MML が必要です。LSM は、Legato NetWorker の縮小版です。

ここでは、次の手順の実行方法について説明します。

- LSM Server の更新
- LSM Server のインストール
- LSM Server の削除

注意： この項の指示に従って LSM Server ソフトウェアをインストールした場合、その同じコンピュータに LSM Administrator GUI を別途インストールする必要はありません。

LSM Server の更新

次に、Windows NT で LSM Server を新しいバージョンに更新する手順を示します。

1. D-5 ページの「LSM Server の削除」の手順に従って「Partial」を選択し、LSM Server を部分削除します。
2. D-2 ページの「LSM Server のインストール」の手順に従って、LSM Server の更新済バージョンをインストールします。

LSM Server のインストール

Oracle Universal Installer を使用しない LSM Server のインストール

次に、LSM Server をインストールする手順を示します。

1. Windows NT または Windows 2000 の Administrator グループのメンバーとしてコンピュータにログインします。
2. SQL*Plus を使用して、Windows システム上のすべての Oracle インスタンスをシャットダウンします。
3. すべての Oracle データベース・サービスを停止します。Oracle データベース・サービスは、OracleService*SID* の形式です。
   a. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」を選択します。
   b. 「サービス」を選択します。
   c. 「OracleService*SID*」を選択し、「停止」を選択します。

d. 「閉じる」を選択して、「サービス」ウィンドウを閉じます。

4. コンポーネント CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。「Autorun」ウィンドウが表示されます。

   「Autorun」ウィンドウが表示されない場合は、次の操作を行います。

   a. 「スタート」→「実行」を選択します。

   b. 次のコマンドを入力します。

      DRIVE_LETTER:¥AUTORUN¥AUTORUN.EXE

      「Autorun」ウィンドウが表示されます。

5. 「CD-ROM を検索」を選択します。

6. LSM ディレクトリに移動します。

7. LSM57_NT.EXE 自己解凍 zip ファイルをダブルクリックします。

8. プロンプトで、ファイルを展開するディレクトリを指定します。

9. LSMINST.EXE ファイルのアイコンをダブルクリックします。

   インストールが完了すると、LSM Server ソフトウェアは、デフォルトでは C:¥WIN32APP¥NSR ディレクトリにインストールされます。

重要： LSMINST.EXE を実行すると、デフォルトで、LSM Server ソフトウェアが C:¥WIN32APP¥NSR にインストールされます。十分な領域がない、C: ドライブが存在しないなどの理由で、LSM Server をこのディレクトリにインストールしない場合は、次の手順を実行します。

1. CD-ROM の LSM ディレクトリ全体を、LSM Server をインストールするドライブにコピーします。

2. LSM ディレクトリにある SERVER.ISS ファイルを変更します。Path=C:¥WIN32APP¥NSR¥ を Path=< ドライブ >:< パス名 > に変更します。ドライブ名（デフォルトは C）またはディレクトリのパス名（デフォルトは ¥WIN32APP¥NSR¥）のみを変更することも、その両方を変更することもできます。Path は ¥NSR で終わる必要があります。また、Path に空白を含まないでください。更新済の SERVER.ISS ファイルを上書き保存します。

3. LSMINST.EXE ファイルのアイコンをダブルクリックします。

次の手順に従って、インストール状況を検証します。

---

10. 次のように、Legato サービスが開始されたことを確認します。
    a. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」を選択します。
    b. 「サービス」をダブルクリックします。
    c. 次のサービスが「開始」状態に設定されていることをチェックします。

    ```
    NetWorker Backup and Recover Server
    NetWorker Power Monitor (on Windows 2000 only)
    NetWorker Remote Exec Service
    ```

11. 次のように、LSM をインストールしたディレクトリをシステムの検索パスに追加します。
    a. 「コントロール パネル」を開きます。
    b. 「システム」をダブルクリックします。
    c. 「環境」タブを選択します。
    d. 「システム環境変数」リスト・ボックスから「Path」を選択します。
    e. 「値」フィールドに次のパスを追加します。

    ```
    ;C:¥WIN32APP¥NSR¥BIN
    ```

    セミコロン（;）によって、既存のエントリと新規のエントリとを区別します。デフォルト以外のドライブまたはディレクトリへ LSM をインストールした場合は、C:¥WIN32APP¥NSR¥BIN を正しいドライブ名とパス名に置き換えます。パス名は常に ¥BIN で終わります。
    f. 「設定」を選択します。
    g. 「OK」を選択します。
    h. コンピュータを再起動して、変更をすべて有効にします。

    参照： 記憶デバイス構成の詳細は、『Oracle8*i* Legato Storage Manager 管理者ガイド』の「メディア管理」を参照してください。

LSM Server の削除

重要： LSM から Legato NetWorker Module for Oracle にアップグレードする場合は、索引を削除しないでください。「Partial」を選択します。ファイル索引（¥NSR¥INDEX）、サーバー・リソース・ファイル（¥NSR¥RES）、メディア・データベース（¥NSR¥MM）の、最新の全体バックアップを必ずとるようにしてください。アップグレードするバージョンの『Installation Guide for the Legato NetWorker Module for Oracle』を参照してください。

Oracle Universal Installer を使用して LSM Server を削除することはできません。LSM Server ソフトウェアを削除するには、次の手順を実行します。

次に、LSM Server を削除する手順を示します。

1. Windows NT または Windows 2000 の Administrator グループのメンバーとしてコンピュータにログインします。
2. SQL*Plus を使用して、Windows システム上のすべての Oracle インスタンスをシャットダウンします。
3. すべての Oracle データベース・サービスを停止します。Oracle データベース・サービスは、OracleService*SID* の形式です。
   a. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」を選択します。
   b. 「サービス」をダブルクリックします。
   c. 「OracleService*SID*」を選択し、「停止」を選択します。
   d. 「閉じる」を選択して、「サービス」ウィンドウを閉じます。
4. 「スタート」→「プログラム」→「NetWorker Group」→「Uninstall NetWorker」を選択します。
5. 「Complete」または「Partial」を選択します。

   注意： すべてのデータベース、索引およびリソース・ファイルを削除する場合にのみ、「Complete」を選択してください。

   NetWorker Uninstaller によって LSM がコンピュータから削除されます。
6. Windows NT 上で前のバージョンの LSM Server ソフトウェアからアップグレードする場合は、C:¥WINNT¥SYSTEM32 ディレクトリからインタフェース・ファイル ORASBT.DLL を削除します。WINNT は Windows NT のインストール・ディレクトリです。

7. 「Partial」を選択した場合は、NSR¥BIN ディレクトリを手動で削除してください。たとえば、LSM がデフォルト・ディレクトリにインストールされていた場合は、C:¥WIN32APP¥NSR¥BIN ディレクトリを削除してください。

LSM Administrator GUI

LSM Server を別の Windows NT または Windows 2000 コンピュータから管理する場合は、そのコンピュータに LSM Administrator GUI（コンポーネント CD-ROM に含まれています）をインストールする必要があります。

ここでは、次の手順の実行方法について説明します。

- LSM Administrator GUI の更新
- LSM Administrator GUI のインストール
- LSM Administrator GUI の削除

LSM Administrator GUI の更新

次に、Windows NT クライアント・コンピュータ上の LSM Administrator GUI を新しいバージョンに更新する手順を示します。

1. D-8 ページの「LSM Administrator GUI の削除」の手順に従って、既存の LSM Administrator GUI を完全に削除します。
2. D-6 ページの「LSM Administrator GUI のインストール」の手順に従って、更新されたバージョンの LSM Administrator GUI をインストールします。

LSM Administrator GUI のインストール

LSM Server を使用してテープにバックアップし、Windows NT または Windows 2000 クライアント・コンピュータから LSM Server を管理する場合は、クライアント・コンピュータ上に LSM Administrator GUI をインストールする必要があります。

注意： LSM Administrator GUI のインストールは、Windows NT および Windows 2000 でのみサポートされます。また、LSM Administrator GUI をインストールする前に、その Windows NT または Windows 2000 クライアント・コンピュータに、LSM Server および NetWorker ソフトウェアが現在インストールされていないことを確認してください。

次に、Windows NT または Windows 2000 クライアント・コンピュータに LSM Administrator GUI をインストールする手順を示します。

1. Windows NT または Windows 2000 の Administrator グループのメンバーとしてコンピュータにログインします。
2. コンポーネント CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
3. CD-ROM の LSM フォルダに移動します。
4. LSM57_NT.EXE 自己解凍 zip ファイルをダブルクリックします。
5. プロンプトで、ファイルを展開するディレクトリを指定します。
6. SETUP.EXE のアイコンをダブルクリックするか、コマンド・オプションを指定せずに MS-DOS コマンド・プロンプトから SETUP.EXE を実行します。「SETUP Options」が表示されます。
7. 「Client Only」を選択し、「Next」を選択します。
8. デフォルトの C:¥Program Files¥NSR ディレクトリに LSM Administrator GUI をインストールする場合は、「Choose destination directory」ウィンドウで「Next」を選択します。別のインストール先ディレクトリを選択する場合は、「Browse」を選択し、目的の位置を選択します。
9. 「Authorize NetWorker Servers」ウィンドウでは、フィールドを空白にしたまま、「Next」を選択します。

   ソフトウェアが正常にインストールされたことを示すメッセージ・ボックスが表示されます。
10. 「OK」を選択します。
11. 次のように、Legato サービスが開始されたことを確認します。
    a. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」を選択します。
    b. 「サービス」をダブルクリックします。
    c. 次のサービスが「開始」状態に設定されていることをチェックします。

       ```
       NetWorker Power Monitor (on Windows 2000 only)
       NetWorker Remote Exec
       ```

       参照：『Oracle8*i* Legato Storage Manager 管理者ガイド』には、LSM Administrator GUI の使用方法の詳細があります。

LSM Administrator GUI の削除

次に、Windows NT または Windows 2000 クライアント・コンピュータから LSM Administrator GUI を削除する手順を示します。

1. Windows NT または Windows 2000 の Administrator グループのメンバーとしてコンピュータにログインします。
2. SQL*Plus を使用して、Windows システム上のすべての Oracle インスタンスをシャットダウンします。
3. すべての Oracle データベース・サービスを停止します。Oracle データベース・サービスは、OracleService*SID* の形式です。
   a. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」を選択します。
   b. 「サービス」をダブルクリックします。
   c. 「OracleService*SID*」を選択し、「停止」を選択します。
   d. 「閉じる」を選択して、「サービス」ウィンドウを閉じます。
4. 「スタート」→「プログラム」→「NetWorker Group」→「Uninstall NetWorker」を選択します。
5. 「Uninstall NetWorker」ウィンドウで、削除オプションとして「Complete」を選択し、「OK」を選択します。
6. クライアントが正常に削除されたことを示すメッセージ・ボックスが表示されたら、「OK」を選択します。

用語集

IPC

データベースと通信するためにリスナーと同じノードに置かれる、クライアント・アプリケーションで使用されるプロトコル。

LDAP.ORA ファイル（LDAP.ORA file）

次のディレクトリ・アクセス情報を含む、Net8 Configuration Assistant により作成されるファイル。

- ディレクトリのタイプ
- ディレクトリの位置
- クライアントまたはサーバーがデータベース・サービスに接続するための接続識別子を検索または構成するために使用する、デフォルトの管理コンテキスト

LDAP.ORA ファイルは、*ORACLE_BASE*¥*ORACLE_HOME*¥NETWORK¥ADMIN に置かれている。

LISTENER.ORA ファイル（LISTENER.ORA file）

リスナーが次を識別するための構成ファイル。

- リスナー名
- 接続要求を受け付けたプロトコル・アドレス
- リスニング中のサービス

LISTENER.ORA ファイルは、*ORACLE_BASE*¥*ORACLE_HOME*¥NETWORK¥ADMIN に置かれている。

Oracle8*i* データベースはサービス登録によりデータベース・サービスの識別を必要としない。しかし Oracle Enterprise Manager を使用する計画がある場合は、Oracle8*i* データベースに静的サービス構成は必要である。

OPS$

初期化ファイル・パラメータ OS_AUTHENT_PREFIX により、データベースに接続するユーザーを認証するために Oracle で使用される接頭辞をユーザーが指定できる。Oracle は、このパラメータの値をユーザーのオペレーティング・システム・アカウント名およびパスワードの前に連結する。接続要求が発行されると、Oracle は接頭辞の付いたユーザー名をデータベース内の Oracle ユーザー名と比較する。

このパラメータのデフォルト値は ""（NULL 文字列）であり、オペレーティング・システム・アカウント名に接頭辞が追加されたものは除去される。以前のリリースでは、OPS$（オペレーティング・システム固有の短縮名）がデフォルト設定だった。

Oracle コンテキスト（Oracle Context）

相対識別名が cn=OracleContext のディレクトリ・サブツリーのルートで、すべての Oracle ソフトウェア情報が保持される。ディレクトリ内には 1 つ以上の Oracle コンテキストを含めることができる。Oracle コンテキストは、ディレクトリ・ネーミング・コンテキストと関連付けることができる。

Oracle コンテキストは、次の Oracle エントリを含めることができる。

- Net8 ディレクトリ・ネーミングとともに使用してデータベース接続を行う接続識別子
- Oracle Advanced Security とともに使用するエンタープライズ・ユーザー・セキュリティ

Oracle スキーマ（Oracle schema）

LDAP 準拠のディレクトリ・サーバーに格納できるものを決定する規則の集合。Oracle は、Net8 エントリを含む多くのタイプの Oracle エントリに適用される独自のスキーマを持つ。Net8 エントリ用の Oracle スキーマは、エントリに含まれる属性を含む。

Oracle ホーム（Oracle home）

Oracle コンポーネントをインストールするディレクトリ・パス（たとえば、D:¥Oracle¥Ora81 など）。Oracle Universal Installer の「ファイルの場所」ウィンドウの「パス」フィールドで、Oracle ホームの入力が要求される。

Oracle ホーム名（Oracle home name）

現在の Oracle ホームの名前。各 Oracle ホームには、コンピュータ上のすべての Oracle ホームと区別するために名前が付いている。インストール時に、Oracle Universal Installer の「ファイルの場所」ウィンドウの「名前」フィールドで、Oracle ホーム名の入力が要求される。

SQLNET.ORA ファイル（SQLNET.ORA file）

クライアントまたはサーバーの構成ファイルで、次を指定する。

- 修飾されていないサービス名またはネット・サービス名に追加されるクライアント・ドメイン
- 名前を解決するときにクライアントが使用するネーミング・メソッドの順序
- 使用するロギング機能およびトレース機能
- 接続の経路
- Oracle Names サーバーの作業環境
- 外部ネーミング・パラメータ
- Oracle Advanced Security パラメータ

SQLNET.ORA ファイルは、*ORACLE_BASE*¥*ORACLE_HOME*¥NETWORK¥ADMIN に置かれている。

TNSNAMES.ORA ファイル（TNSNAMES.ORA file）

接続記述子にマップされるネット・サービス名を含む構成ファイル。このファイルは、ローカル・ネーミング・メソッド用に使用される。TNSNAMES.ORA ファイルは、*ORACLE_BASE*¥*ORACLE_HOME*¥NETWORK¥ADMIN に置かれている。

インストール・タイプ（installation types）

Oracle Universal Installer をコンポーネント CD-ROM から実行する場合は、インストール・タイプのインストールが要求される。各インストール・タイプには、一連のコンポーネントが含まれる。次のインストール・タイプをインストールに使用できる。

- 管理者
- プログラマ
- アプリケーション・ユーザー
- カスタム

> **参照：** 各インストール・タイプでインストールされるコンポーネントのリストは、付録 A「インストール可能な個々のコンポーネント」を参照。

オペレーティング・システムの認証による接続（operating system authenticated connections）

Windows NT ログイン資格証明を Oracle8*i* データベースへのユーザー接続の認証に使用できる。Windows NT ネイティブの認証には、次の利点がある。

- ユーザーはユーザー名やパスワードを入力しなくても、複数の Oracle8*i* データベースに接続できる。
- Oracle8*i* データベースのユーザー認可情報を Windows NT で一元管理することによって、Oracle8*i* でユーザー・パスワードを保管または管理する必要がなくなる。

管理コンテキスト（administrative context）

Oracle コンテキストが置かれるディレクトリ・エントリ。管理コンテキストは、ディレクトリ・ネーミング・コンテキストとなることも可能。ディレクトリ・アクセスの構成中に、クライアントはディレクトリ構成ファイル（LDAP.ORA）内の管理コンテキストを使用して構成される。管理コンテキストは、クライアントがアクセスするディレクトリ内の Oracle コンテキストの場所を指定する。Windows 2000 では、ドメインが管理コンテキストになる。

サービス登録（service registration）

PMON プロセス（インスタンス・バックグラウンド・プロセス）がリスナーに情報を自動的に登録する機能。この情報はリスナーに登録されるため、LISTENER.ORA ファイルはこの静的情報とともに構成する必要はない。

サービス登録はリスナーに次の情報を提供する。

- 実行中のデータベースの各インスタンス用のサービス名
- データベースのインスタンス名
- 各インスタンスで利用可能なサービス・ハンドラ（ディスパッチャおよび専用サーバー）

  これにより、リスナーがクライアントの要求を正しく管理できる。
- ディスパッチャ、インスタンスおよびノードのロード情報

  これにより、リスナーがクライアントの接続要求を処理できる最良のディスパッチャを決定できる。すべてのディスパッチャがブロックされている場合、リスナーは接続に対して専用サーバーを実行できる。

修飾されていない名前（unqualified name）

ネットワーク・ドメインを含まないネット・サービス名。

接続記述子（connect descriptor）

ネットワーク接続の宛先で、特別なフォーマットの記述のもの。接続記述子は、宛先サービスおよびネットワーク経路情報を含む。

リリース 8.0 またはバージョン 7 の Oracle データベースでは、宛先サービスは Oracle8*i* データベース用のサービス名またはその Oracle システム識別子（SID）を使用して表される。ネットワーク経路は、最低でも、ネットワーク・アドレスを使用してリスナーの場所を提供する。

接続識別子（connect identifier）

接続記述子を解決する名前、ネット・サービス名またはサービス名。ユーザーは、接続するサービスに対する接続文字列内に、接続識別子とともにユーザー名およびパスワードを渡すことで接続要求を開始する。たとえば、次のようにする。

```
SQL> CONNECT USERNAME/PASSWORD@CONNECT_IDENTIFIER
```

ディレクトリ・サーバー（directory server）

LDAP（Lightweight Directory Access ProtocolL）を使用してアクセスされる LDAP 準拠のディレクトリ・サーバー。ディレクトリは集中化された記憶領域を提供し、データベース・ネットワーク・コンポーネント、ユーザー方針およびコーポレート方針の作業環境、ユーザーの認証およびセキュリティの情報を取り出し、クライアント側とサーバー側のローカル・ファイルを置き換える。

ディレクトリ情報ツリー（Directory Information Tree: DIT）

エントリの識別名（Distinguished Name: DN）のディレクトリ・サーバー内の階層的なツリー構造。

ディレクトリ・ネーミング・コンテキスト（directory naming context）

ディレクトリ・サーバー内の重要なサブツリー。通常、編成されているいくつかのサブツリーの一番上となる。一部のディレクトリでは固定されたコンテキストのみ許される。他はディレクトリ管理者によりゼロ個以上が構成される。

ディレクトリ・ネーミング・メソッド（directory naming method）

データベース・サービスまたはネット・サービス名を接続記述子に解決するネーミング・メソッドで、中央のディレクトリ・サーバーに格納される。

ディレクトリは、データベース・サービスおよびネット・サービス名の集中管理を提供し、サービスの追加または再配置に関連する作業量を軽減する。ネット・サービス名はサービスの別名として構成できるのに対し、ディレクトリはネット・サービス名を使用せずにデータベース・サービス・ディレクトリを参照できる。さらに構成を簡単にするために、インストール中にデータベース・サービスはディレクトリ内のエントリとして自動的に追加される。

デフォルト・ドメイン（default domain）

ほとんどのクライアント要求が置かれるネットワーク・ドメイン。クライアントが置かれるドメイン、またはクライアントがネットワーク・サービスを要求するドメインとなることがある。デフォルト・ドメインは、修飾されていないネットワーク名要求に追加されるドメインを決定するクライアント構成パラメータにもなる。"." 文字を含まない場合、名前要求は修飾されない。

ネーミング・メソッド（naming method）

データベース・サービスに接続するためにクライアント・アプリケーションで接続識別子をネットワーク・アドレスに解決するために使用される解決方法。Net8 は、次のネーミング・メソッドをサポートする。

- ローカル・ネーミング
- ディレクトリ・ネーミング
- Oracle Names
- ホスト・ネーミング
- 外部ネーミング

ネット・サービス名（net service name）

接続記述子に解決されるサービスの単純名。ユーザーは、接続するサービスに対する接続文字列内に、ネット・サービス名とともにユーザー名およびパスワードを渡すことで接続要求を開始する。たとえば、次のようにする。

```
SQL> CONNECT USERNAME/PASSWORD@NET_SERVICE_NAME
```

要求に応じて、ネット・サービス名は次のような様々な場所に格納できる。

- ローカル構成ファイル（各クライアントの TNSNAMES.ORA）
- ディレクトリ・サーバー
- Oracle Names サーバー
- 外部ネーミング・サービス（Novell Directory Service（NDS）、Network Information Service（NIS）、Cell Directory Service（CDS）など）

プロトコル・アドレス（protocol address）

ネットワーク・オブジェクトのネットワーク・アドレスを識別するアドレス。

接続が行われるとき、クライアントとその要求の受信者（リスナー、Oracle Names Server または Oracle Connection Manager）は同じプロトコル・アドレスを使用して構成される。クライアントはこのアドレスを使用して接続要求を特定のネットワーク・オブジェクト位置に送信し、レシピエントはこのアドレスで要求のリスニングを行う。クライアントと接続レシピエントに対して同じプロトコルをインストールし、同じアドレスを構成することが重要である。

データベースと通信するためにリスナーと同じノードに置かれる、クライアント・アプリケーションで使用されるプロトコル。

リスナー（listener）

クライアントからの接続要求をリスニングし、サーバーへの通信量を管理する責任のあるサーバーに置かれるプロセス。

クライアントがサーバーとのネットワーク・セッションを要求するたびに、リスナーは実際の要求を受け取る。クライアント情報がリスナーの情報と一致した場合、リスナーはサーバーへの接続を許可する。

ローカル・ネーミング・メソッド（local naming method）

クライアントの TNSNAMES.ORA ファイル内に格納されるネット・サービス名をサービスのネットワーク・アドレスおよび識別に解決するネーミング・メソッド。頻繁に変更されない少数のサービスを行う簡単な分散ネットワークには、ローカル・ネーミングが最も適している。

索引

数字

3DES_112 Encryption サポート
　使用可能なインストール・タイプ，A-2
3DES_168 Integrity サポート
　使用可能なインストール・タイプ，A-2

A

Active Directory サポート
　8.1.6 での新機能，1-4
　Oracle との統合のためのインストール前の要件，3-4
Administrators グループ
　Oracle インストールの要件，5-3
Adobe Acrobat Reader
　インストール後のドキュメントの表示，5-10
　コンポーネント CD-ROM からのインストール，5-9
　メモリー・エラー，5-10
Advanced Program-to-Program Communication（APPC）
　定義，B-10
APPC アーキテクチャ，B-10
Assistant Common Files
　定義，B-2

B

BaliShare，B-2

C

C:¥>
　定義，viii
CyberSafe サポート
　「カスタム」インストール・タイプによるインストール，5-7
　使用可能なインストール・タイプ，A-3

D

DBUI，B-2
DCE サポート
　使用可能なインストール・タイプ，A-3
DES40 Encryption サポート
　使用可能なインストール・タイプ，A-2，A-3
DES56 Encryption サポート
　使用可能なインストール・タイプ，A-2，A-3

E

Entrust サポート
　「カスタム」インストール・タイプによるインストール，5-7
　使用可能なインストール・タイプ，A-3
EWT，B-2
Export Utility，B-12
　使用可能なインストール・タイプ，A-6

F

FAT
　システム要件，3-2

H

HOME_NAME
　定義，ix
HOME*ID*
　定義，ix

I

ICE Browser，B-2
Identix サポート
　「カスタム」インストール・タイプによるインストール，5-7
　使用可能なインストール・タイプ，A-3
Import Utility，B-12
　使用可能なインストール・タイプ，A-6
INSTALLACTIONS.LOG ファイル，3-5，5-8
IPC
　定義，用語集 -1

J

Java Runtime Environment
　使用可能なインストール・タイプ，A-5
　定義，B-2
Java Swing Components，B-2
Java が使用可能なブラウザ，5-8
JDBC，B-9

K

Kerberos サポート
　「カスタム」インストール・タイプによるインストール，5-7
　使用可能なインストール・タイプ，A-3
Kodiak，B-2

L

LDAP.ORA ファイル
　Net8 Configuration Assistant での構成，4-4，4-5
　定義，用語集 -1
LDAP 準拠のディレクトリ・サーバー
　ディレクトリ・サーバーでクライアントを構成，4-4，4-5
Legato
　Legato コンポーネントのインストール，D-1
　Legato コンポーネントの削除，D-1
　Recovery Manager での構成，3-4
　コンポーネントの説明，B-2
LISTENER.ORA ファイル
　定義，用語集 -1
LSM Administrator GUI
　LSM Server とともに使用，D-2，D-6
　インストール，D-6
　クライアント・コンピュータからの LSM Server の管理，D-6
　更新，D-6
　削除，D-8
　定義，B-2
LSM Server
　LSM Administrator GUI とともに使用，D-2，D-6
　Recovery Manager での構成，3-4，D-2
　Windows NT サービス，D-4，D-7
　更新，D-2
　削除，D-5
　手動インストール，D-2
　定義，B-3，D-2
LSMINST.EXE ファイル，D-3
LU6.2 プロトコル・サポート
　サポートしているトポロジー，B-10
　サポートしているネットワーク，B-10
　定義，B-10

M

MD5 Integrity サポート
　使用可能なインストール・タイプ，A-3
Microsoft ODBC 仕様
　Oracle ODBC Driver が準拠する，B-10
MS-DOS モード
　NLS_LANG パラメータの設定，C-4

N

Named Pipes プロトコル・サポート
　サポートしているベンダー，3-6
　定義，B-11
NDS Naming Integration
　サポートしているベンダー，3-6
NDS 外部ネーミング・サポート
　サポートしているベンダー，3-6
Net8
　インストール後の構成作業，6-3
　クライアント環境の構成，4-4
　構成に必要なユーザー入力，4-2
　構成方法の選択，4-3
　削除，7-2
　サポートされる構成方法，4-2
　ディレクトリ・サーバーでクライアントを構成，4-4，4-5

ネットワーク構成ファイルの場所，4-3
Net8 Assistant
使用可能なインストール・タイプ，A-2
定義，B-3
Net8 Client
「カスタム」インストール・タイプによるインストール，5-7
使用可能なインストール・タイプ，A-2
定義，B-4
Net8 Configuration Assistant
LDAP.ORA ファイルの構成，4-4，4-5
SQLNET.ORA ファイルの構成，4-4，4-5
TNSNAMES.ORA ファイルの構成，4-4，4-5
クライアント環境の構成，4-4
使用可能なインストール・タイプ，A-2
定義，B-4
ディレクトリ・サーバーへのクライアント・アクセスの構成，4-4
NLS_LANG パラメータ，C-2
MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの設定，C-4
地域およびキャラクタ・セットのデフォルト，C-3
NLS サポート，C-3
NTFS
システム要件，3-2
ファイル・システム権限の設定，6-2

O

Object INTYPE File Assistant
使用可能なインストール・タイプ，A-2
Object Type Translator
使用可能なインストール・タイプ，A-2
定義，B-4
OCI
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-5
ODBC，「Oracle ODBC Driver」を参照
Open Systems Interconnect（OSI）モデル，B-10
OPS$
構成，4-5
定義，用語集 -2
Oracle Advanced Security
Oracle Enterprise Login Assistant，A-4
Oracle Enterprise Security Manager，A-4
Oracle Wallet Manager，A-4
SSO サポートの定義，B-5
Thin JDBC Java ベースの暗号化サポート，A-3
暗号化と整合性のサポート，A-2
暗号化と整合性のサポートの定義，B-5
インストール後の構成作業，6-3
インストール前の要件，3-4
エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ，A-4
エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ・サポートの定義，B-5
概要の定義，B-5
「カスタム」インストール・タイプによるインストール，5-7
使用可能なインストール・タイプ，A-2
認可サポートの定義，B-5
認証サポート，A-3
認証サポートの定義，B-5
Oracle AppWizard for Microsoft Visual C++
8.1.7 では使用できない，A-6
Oracle Call Interface
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-5
Oracle DBA Management Pack
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-6
Oracle DBA Studio
Oracle Replication Manager 機能を含む，A-4
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-6
Oracle Directory Manager
使用可能なインストール・タイプ，A-5
定義，B-6
Oracle Enterprise JavaBeans and CORBA Tools
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-6
Oracle Enterprise Login Assistant
Oracle Advanced Security の機能，A-4
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-6
Oracle Enterprise Manager
インストール後の構成作業，6-4
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-6
Oracle Enterprise Manager Client
Web 対応のシステム要件，3-3
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-6
Oracle Enterprise Manager Events
使用可能なインストール・タイプ，A-4

定義，B-7
Oracle Enterprise Manager Integrated Applications
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-7
Oracle Enterprise Manager Migration Assistant
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-7
Oracle Enterprise Manager Paging Server
インストール前の要件，3-4
使用可能なインストール・タイプ，A-5
定義，B-8
Oracle Enterprise Manager Quick Tours
使用可能なインストール・タイプ，A-5
定義，B-8
Oracle Enterprise Manager Web Site
サポートされる Web ブラウザ，3-3
Oracle Enterprise Manager コンソール
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-7
Oracle Enterprise Security Manager
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-8
Oracle Forms Server Manager
使用可能なインストール・タイプ，A-5
定義，B-8
Oracle Help for Java，B-2
Oracle Home Selector
使用可能なインストール・タイプ，A-5
定義，B-8
Oracle Instance Manager
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-8
Oracle *inter*Media Client Option
使用可能なインストール・タイプ，A-5
Oracle *inter*Media Text Manager
使用可能なインストール・タイプ，A-5
Oracle Internet Directory
MS-DOS モードでのコマンドライン・ツールの実行，C-4
NLS の問題，C-6
ツールに必要な NLS_LANG 環境変数，C-6
Oracle Internet Directory Client
使用可能なインストール・タイプ，A-5
定義，B-9
Oracle Internet File System
CD-ROM が使用可能，B-9
定義，B-9
Oracle INTYPE File Assistant
定義，B-9
Oracle JDBC Drivers
使用可能なインストール・タイプ，A-5
定義，B-9
Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.1
使用可能なインストール・タイプ，A-5
Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.2
使用可能なインストール・タイプ，A-5
Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.1
使用可能なインストール・タイプ，A-5
Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.2
使用可能なインストール・タイプ，A-5
Oracle Migration Workbench
使用可能なインストール・タイプ，A-5
定義，B-9
非 Oracle データベースからの移行がサポートされる，B-9
Oracle Objects for OLE
使用可能なインストール・タイプ，A-5
単一 Oracle ホーム・コンポーネント，3-5
定義，B-9
Oracle ODBC Driver
Microsoft ODBC 仕様に準拠，B-10
使用可能なインストール・タイプ，A-5
単一 Oracle ホーム・コンポーネント，3-5
定義，B-10
Oracle Open Database Connectivity Driver，「Oracle ODBC Driver」を参照
Oracle Parallel Server Manager
使用可能なインストール・タイプ，A-5
定義，B-10
Oracle Protocol Support
LU6.2 の定義，B-10
Named Pipes の定義，B-11
SPX の定義，B-11
TCP/IP の定義，B-11
「カスタム」インストール・タイプによるインストール，5-7
使用可能なインストール・タイプ，A-2
Oracle Provider for OLE DB
8.1.6 の新規コンポーネント，1-4
使用可能なインストール・タイプ，A-5
単一 Oracle ホーム・コンポーネント，3-5
定義，B-11
Oracle Replication Manager
Oracle DBA Studio に含まれる機能，A-4

Oracle Schema Manager
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-11
Oracle Security Manager
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-12
Oracle Services for Microsoft Transaction Server
Microsoft Transaction Server のインストールが必要，5-7
インストール後の構成作業，6-4
「カスタム」インストール・タイプによるインストール，5-7
使用可能なインストール・タイプ，A-5
定義，B-12
Oracle Spatial Index Advisor
使用可能なインストール・タイプ，A-5
定義，B-12
Oracle SQLJ
使用可能なインストール・タイプ，A-5
定義，B-12
Oracle Storage Manager
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-12
Oracle Universal Installer
8.1.5 より前のホームへのインストールの制限事項，5-4
Net8 Configuration Assistant の実行，4-3
Net8 環境の構成，4-2
Net8 構成方法の選択，4-3
Oracle コンポーネントの削除，7-2
インストールの概要，2-4
キーボード・ナビゲーション，5-2
コンポーネントのインストール，2-4
コンポーネントの削除，7-3
使用可能なインストール・タイプ，A-5
使用方法のドキュメント，2-2
定義，2-2，B-12
Oracle Utilities
Export Utility，B-12
Import Utility，B-12
Migration Utility，B-12
MS-DOS モードでの設定，C-4
Recovery Manager，B-12
Server Manager，B-12
SQL*Loader，B-12
使用可能なインストール・タイプ，A-6
定義，B-12
Oracle Visual Information Retrieval Client
使用可能なインストール・タイプ，A-6
定義，B-12
Oracle Wallet Manager
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-13
Oracle Web Publishing Assistant
8.1.7 では使用できない，A-6
Oracle Windows NT サービス
停止，5-3
Oracle Workflow Builder
Oracle との統合のためのインストール前の要件，3-4
インストール後の構成作業，6-4
使用可能なインストール・タイプ，A-6
定義，B-13
Oracle Workflow Mailer
Oracle との統合のためのインストール前の要件，3-4
インストール後の構成作業，6-4
使用可能なインストール・タイプ，A-6
定義，B-13
Oracle XML Developer's Kit
使用可能なインストール・タイプ，A-6
定義，B-13
Oracle XML SQL Utility
使用可能なインストール・タイプ，A-6
定義，B-14
ORACLE_BASE
定義，viii
ORACLE_HOME
環境での設定の制限事項，5-3
定義，viii，ix
ORACLE_HOME 環境パラメータ
パスに設定しない，5-3
Oracle8*i*
Windows NT と UNIX でのインストールの相違，5-2
機能，1-2
Oracle8*i* Client
使用可能なインストール・タイプ，A-2，3-2
Oracle8*i* Windows Documentation
使用可能なインストール・タイプ，A-6
定義，B-14
Oracle コンテキスト
定義，用語集 -2
Oracle サービス

停止，5-3
Oracle スキーマ
定義，用語集 -2
Oracle ホーム
単一 Oracle ホーム・コンポーネント，3-5
単一ホーム・コンポーネントの 2 回目のインストール，3-5
定義，用語集 -2
Oracle ホーム名
最大長，5-5
定義，用語集 -2
ORASBT.DLL ファイル，D-3，D-5
OTT
使用可能なインストール・タイプ，A-2
定義，B-4

P

PDF
コンポーネント CD-ROM からの Adobe Acrobat Reader のインストール，5-9
PL/SQL
使用可能なインストール・タイプ，A-6
定義，B-14
Pro*C/C++
使用可能なインストール・タイプ，A-6
定義，B-14
Pro*COBOL
インストール後の構成作業，6-4
使用可能なインストール・タイプ，A-6
定義，B-14

R

RADIUS サポート
使用可能なインストール・タイプ，A-3
Radius サポート
「カスタム」インストール・タイプによるインストール，5-7
RC4_128 Encryption サポート
使用可能なインストール・タイプ，A-2，A-3
RC4_256 Integrity サポート
使用可能なインストール・タイプ，A-2，A-3
RC4_40 Encryption サポート
使用可能なインストール・タイプ，A-2，A-3
RC4_56 Encryption サポート
使用可能なインストール・タイプ，A-2，A-3
Recovery Manager，B-12
LSM Server での構成，3-4
MML の要件，D-2
インストール前の要件，3-4
使用可能なインストール・タイプ，A-6
Replication API
使用可能なインストール・タイプ，A-6
定義，B-14
RMAN，「Recovery Manager」を参照

S

SecurID Authentication Adapter
サポートしているベンダー，3-6
SecurID サポート
「カスタム」インストール・タイプによるインストール，5-7
使用可能なインストール・タイプ，A-3
Server Manager，B-12
SHA-1 Encryption サポート
使用可能なインストール・タイプ，A-3
SMUI，B-2
SNA，B-10
SPX プロトコル・サポート
サポートしているベンダー，3-6
定義，B-11
SQL*Loader，B-12
使用可能なインストール・タイプ，A-6
SQL*Plus
MS-DOS モードでの NLS_LANG パラメータの設定，C-4
オンライン・ヘルプのインストール，6-4
使用可能なインストール・タイプ，A-6
定義，B-15
SQL*Plus Worksheet
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-15
SQLJ Runtime
使用可能なインストール・タイプ，A-5
定義，B-15
SQLJ Translator
使用可能なインストール・タイプ，A-5
定義，B-15
SQLNET.ORA ファイル
Net8 Configuration Assistant での構成，4-4，4-5
定義，用語集 -3
SSL サポート

使用可能なインストール・タイプ，A-3
SSO サポート
使用可能なインストール・タイプ，A-3
定義，B-5
System Network Architecture（SNA），B-10

T

TCP/IP プロトコル・サポート
サポートしているベンダー，3-6
定義，B-11
Thin JDBC Java ベースの暗号化サポート
使用可能なインストール・タイプ，A-3
TNSNAMES.ORA ファイル
Net8 Configuration Assistant での構成，4-4，4-5
定義，用語集 -3

U

UNIX
Windows NT での Oracle のインストールとの相違，5-2

W

Web ブラウザ
Oracle Enterprise Manager Web Site の実行でサポートされるブラウザ，3-3
インストール，5-8
インストール後のドキュメントの表示，5-9
Windows 95
最初の Oracle インストール後の再起動，5-3
Windows 98
最初の Oracle インストール後の再起動，5-3
Windows NT
UNIX での Oracle のインストールとの相違，5-2
Windows Terminal Server
サポート，1-2
Windows 固有の認証
サポートしているベンダー，3-6
WINSOCK2 on Windows NT サポート
定義，B-15

X

X.509 サポート
使用可能なインストール・タイプ，A-3
XML
Oracle XML Developer's Kit，A-6，B-13
Oracle XML SQL Utility，A-6

あ

アドバンスト・キューイング API
使用可能なインストール・タイプ，A-2
定義，B-2
「アプリケーション・ユーザー」インストール・タイプ
インストール，5-5
インストールされるコンポーネント，A-2
システム要件，3-2
定義，2-3
暗号化と整合性のサポート
使用可能なインストール・タイプ，A-2
定義，B-5

い

移行
非 Oracle のデータベースから，B-9
要件，3-3
イタリック
定義，vii
インストール
8.1.5 より前のホームへのインストールの制限事項，5-4
UNIX と Windows NT での Oracle のインストールの相違，5-2
「アプリケーション・ユーザー」インストール・タイプ，5-5
インストール・セッションのログの確認，5-8
インストール前，5-3
概要，2-4
「カスタム」インストール・タイプ，5-6
「管理者」インストール・タイプ，5-5
キーボード・ナビゲーション，5-2
使用可能なインストール・タイプ，A-1
使用可能なコンポーネント，2-2，A-1
手順，5-4
古い Oracle Installer 使用上の制限事項，5-4
「プログラマ」インストール・タイプ，5-5

インストール後
NTFS ファイル・システムの権限の設定，6-2
Windows NT レジストリのセキュリティ設定，6-3
個々のコンポーネントの構成要件，6-3
インストール・タイプ
Oracle8*i* Client，3-2，A-2
使用可能，2-2
定義，用語集 -3
インストール・ドキュメント
使用可能なインストール・タイプ，A-6
定義，B-14
インストール前
Active Directory と Oracle8*i* の統合の要件，3-4
Oracle Advanced Security の要件，3-4
Oracle Enterprise Manager Paging Server の要件，3-4
Oracle Workflow Builder の要件，3-4
Oracle Workflow Mailer の要件，3-4
Recovery Manager の要件，3-4
個々のコンポーネントの要件，3-4
サービスの停止，5-3
作業，5-3

え

円記号（¥）
定義，viii
エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ・サポート
使用可能なインストール・タイプ，A-4
定義，B-5

お

オペレーティング・システムの認証による接続
構成，4-5
定義，用語集 -4

か

概要
Oracle8*i* for Windows NT，1-2
「カスタム」インストール・タイプ
インストール，5-6
定義，2-3
環境
ORACLE_HOME 設定の制限事項，5-3
管理コンテキスト
構成，4-4，4-5
定義，用語集 -4
「管理者」インストール・タイプ
インストール，5-5
インストールされるコンポーネント，A-2
システム要件，3-2
定義，2-2

き

キーボード
ナビゲーション，5-2
記号
リスト，ix
機能
8.1.6 の新規，1-4
8.1.7 の新規，1-3
共通ドキュメントの参照先
Windows NT 固有の NLS_LANG の値，C-3
Windows NT 固有の NLS_TERRITORY の値，C-3

こ

コード
このドキュメントで使用される表記規則，vii
コンポーネント
8.1.6 の新規，1-4
8.1.7 では使用できない，A-6
8.1.7 の新規，1-3
Net8 サービスとレジストリ・エントリの削除，7-2
Oracle Universal Installer で削除，7-2
Windows 95/98 上で手動で削除，7-6
Windows NT 上で手動で削除，7-4
インストール，5-4
インストール後の構成の手引き，6-3
インストールに使用可能，2-2，A-1
インストール前の必須要件，3-4
説明，B-1
単一 Oracle ホーム，3-5
単一 Oracle ホーム・コンポーネントの 2 回目のインストール，3-5

さ

サービス
　停止，5-3
サービス登録
　定義，用語集 -4
作業を始める
　概要，2-5
削除
　Net8 サービスとレジストリ・エントリ，7-2
　Oracle Universal Installer で Oracle コンポーネントを，7-2
　Oracle コンポーネント，7-2，7-4，7-6
　Windows 95/98 上で手動で Oracle コンポーネントを，7-6
　Windows NT 上で手動で Oracle コンポーネントを，7-4

し

システム要件
　FAT および NTFS ファイル・システム，3-2
　Oracle8*i* Client のインストール・タイプ，3-2
　「アプリケーション・ユーザー」インストール・タイプ，3-2
　「管理者」インストール・タイプ，3-2
　「プログラマ」インストール・タイプ，3-2
修飾されていない名前
　定義，用語集 -4
新機能およびコンポーネント
　8.1.6，1-4
　8.1.7，1-3

す

「スタート」→
　定義，vii

せ

接続記述子
　定義，用語集 -5
接続識別子
　定義，用語集 -5

そ

相違
　Windows NT と UNIX での Oracle のインストール，5-2

た

ターミナル・サーバー
　サポート，1-2
大カッコ
　定義，vii
単一 Oracle ホーム
　コンポーネント，3-5
　単一ホーム・コンポーネントの 2 回目のインストール，3-5

て

ディレクトリ・サーバー
　定義，用語集 -5
　ディレクトリ・サーバーへのクライアント・アクセスの構成，4-4，4-5
ディレクトリ情報ツリー
　定義，用語集 -5
ディレクトリ・ネーミング・コンテキスト
　定義，用語集 -5
ディレクトリ・ネーミング・メソッド
　定義，用語集 -5
ディレクトリ名
　使用される表記規則，vii
データベース
　移行の要件，3-3
デフォルト・ドメイン
　構成，4-4，4-5
　定義，用語集 -6

と

ドキュメント
　HTML および PDF 形式の表示，5-9
　Oracle Universal Installer の使用方法，2-2
　Web ブラウザがない場合の表示，5-10
　Web ブラウザでの表示，5-9
　インストール後の PDF ドキュメントのみの表示，5-10
　このドキュメントで使用される表記規則，vii

コンポーネント CD-ROM からの Adobe Acrobat Reader のインストール，5-9

に

認可サポート
定義，B-5
認証サポート
インストール前の要件，3-4
使用可能なインストール・タイプ，A-3
定義，B-5

ね

ネーミング・メソッド
構成，4-4，4-5
定義，用語集 -6
ネット・サービス名
構成，4-4
定義，用語集 -6
ネットワーク
LU6.2 プロトコルをサポートしているトポロジー，B-10
Net8 構成方法の選択，4-3
ネットワーク構成ファイルの場所，4-3
ネットワーク・プロトコル
Oracle のサポート，A-2

は

バッチ・モード
NLS_LANG パラメータの設定，C-4

ひ

必須、個々のコンポーネントの要件，3-4

ふ

ファイル・システム
システム要件，3-2
ファイル名
使用される表記規則，vii
複数 Oracle ホーム
定義，viii，ix
ブラウザ
Java で使用可能，5-8
「プログラマ」インストール・タイプ
インストール，5-5
インストールされるコンポーネント，A-2
システム要件，3-2
定義，2-2
プロトコル
Oracle のサポート，A-2
プロトコル・アドレス
定義，用語集 -7
プロトコル・サポート
サポートしているベンダー，3-6
プロトコル・スタック・ベンダー
要件，3-6

へ

変数
使用される表記規則，vii

ほ

ホスト・ネーミング・アダプタ
サポートしているベンダー，3-6

め

メディア管理レイヤー
定義，D-2

よ

要件
Oracle コンポーネントのインストール後，6-3
「アプリケーション・ユーザー」インストール・タイプ，3-2
インストール前，5-3
「管理者」インストール・タイプ，3-2
個々のコンポーネント，3-4
個々のコンポーネントのインストール前の要件，3-4
データベースの移行，3-3
「プログラマ」インストール・タイプ，3-2

り

リスナー
　インストール前の停止，5-3
　定義，用語集 -7
リリース・ノート
　使用可能なインストール・タイプ，A-6
　定義，B-14

れ

レジストリ
　使用時の注意，7-4
　セキュリティの設定，6-3

ろ

ローカル・ネーミング・メソッド
　定義，用語集 -7
ログ・ファイル
　インストール・セッションの確認，5-8